

韓国華嚴学の研究

曹潤鎬・佐藤厚

1. 緒言
2. 研究史の概観
3. 新羅・高麗代の華嚴学の系統に関する研究
4. 新羅時代の華嚴
5. 高麗時代の華嚴
6. 朝鮮時代の華嚴
7. その他—華嚴信仰に関する研究—
8. 結語—研究の課題と展望—

1. 緒言

本稿は、西暦1900年をはじめから現在に至るほぼ100年の間に、日本の華嚴学研究の中で韓国華嚴学がどのように位置づけられ研究されてきたのかということをもとめることを目的とする。本稿で扱う華嚴学とは、智儼・法蔵らにより形成され、韓国には智儼に師事した義相（湘）¹が伝えた、所謂華嚴教学を中心とする。よって華嚴に関わる主題でも、華嚴信仰の問題については軽く触れる程度に留め、美術などについては触れない。

叙述の順序は、最初に「2. 研究史の概観」として、この100年間の研究

¹ 義湘の表記には、義湘・義相・義想の三種類がある。本稿では「義相」に代表させて用いることとする。ただし、個々の研究の題目などを紹介する際には、その研究者が用いる表記に従うこととする。

動向を概括的に整理する。次いで「3. 新羅・高麗代の華嚴学の系統に関する研究」では、1970年代から様々な見解が出されている新羅時代から高麗時代にかけての華嚴学の系統に関する研究を整理する。続く「4. 新羅時代の華嚴」「5. 高麗時代の華嚴」「6. 朝鮮時代の華嚴」は、時代別に人物・文献に対する研究状況を整理する。以上は教学を中心としたものであり、最後の「7. その他」は、華嚴信仰について触れたものをまとめた。

なお、本稿は曹潤鎬が基本的な整理を行い、佐藤厚がそれを受け継ぐ形で増稿してなったものである。

2. 研究史の概観

(1) 概観

最初に1910年代から現在までの日本での韓国華嚴の研究史を概観することにより、韓国華嚴がどの程度の位置づけを持ちながら研究されてきたかを明らかにする。なお、ここでは大まかな流れを提示することを目的とするため、一部を除いてはそれぞれの時期を代表する著書を中心として述べることにし、細かな問題を扱った論文については次項以後で扱う。

① 1910-1920年代

この時期を代表するものとして、まず亀谷聖馨・河野法雲[1913]『華嚴發達史』では「第十二章 傍依の師を論ず」という項目を設け、その中で「第二節 新羅の義湘、元曉の二法師」として、義相と元曉とに言及している。続いて湯次郎の代表的著作である[1915]『華嚴大系』では、「第一篇 教史」「第四章 支那に於ける華嚴の流行」「第二節 唐朝時代の流行」の中、「第三項 華嚴五祖以外の講布」として「義湘、元曉、李通玄、湛然、神秀」の中で義相と元曉が列挙されている。

これらから、この時期には韓国華嚴が一応は華嚴教学史の中に位置づけられていることがわかる。ただ、義相や元曉が、「傍依」・「五祖以外」といった範疇で括られるのは、日本では伝統的に華嚴宗の史観として、杜順(557-640)－智儼(602-668)－法蔵(645-712)－澄観(738-839)－宗密

(780-841)と師承する五祖説が重視されてきたためであると考えられる。

② 1930-1940年代

この時期の研究で注目されるのは、坂本幸男の研究である。坂本[1935]、坂本[1936]は義湘に関する論文であり、二つで一巻をなすものである。内容は、義相の教学を教判・教理など幾つかの項目に分け、智儼・法蔵との関連で検討を加えている。これ以前にも同様の研究は存在したが、これが博士論文として纏められ坂本[1956]として刊行されたことにより以後の研究の基礎となった点でその意味は大きい。

続いて高峰了州[1942]『華嚴思想史』である。これは現在でも華嚴学に関する通史として評価が高い著作である。本書は全30章からなり、第13章に「元暁及び義湘とその門流」を掲げ、さらに第18章「宗密と教禪一致論の体系」の中に「五 裴休及びその後の学匠・・・均如の思想」として簡略ではあるが初めて均如の思想内容を論じている。本書は、大きな流れとしては伝統五祖説の枠内にあると考えられるが、元暁、義相といった韓国華嚴の人物を独立させて一章を設けていることが特徴的である。

また、これは研究成果ではないが、この時代で是非触れておかなければならないことは、韓国華嚴文献の刊行の問題である。現在、仏教学研究の基礎資料として用いられている『大正新脩大蔵經』は高楠順次郎・渡辺海旭らが中心となり、1922(大正11)年から1934(昭和9)年までの13年間をかけて完成したものであるが、そこには当時日本の勢力下にあった朝鮮で発見された多くの典籍も収録されており、例えば第45巻に収録されている『法界図記叢録』もその一つである。だが、刊行計画の途上では、より多くの韓国華嚴学の文献も収録することになっていたようである。

1930(昭和5)年に刊行された大正一切経刊行会『大正新脩大蔵經総目録』には、第1巻より第55巻に至る第一期の刊行が終了した時点で続刊に対する計画が記されており、その中には後に金知見により1977年に刊行される均如の著作をはじめ、高麗義天の『大覚国師文集』、『釈苑詞林』なども収録予定の書目に挙げられている。これがどのような経緯で収録されないことになったのかはわからないが、これら韓国華嚴に関する典籍がこの計画の通りに進み、1930年代に刊行されていたとしたならば、韓国華嚴学の研

究は今よりも進んだものになっていた可能性は否定できない。この点は誠に惜まれる。

③ 1950-1960年代

この時期の研究としては、1950年代に、前述した坂本[1935]、坂本[1936]を再録した坂本[1956]『華嚴教学の研究』が出る。本書は華嚴宗において長く背師として斥けられてきた静法寺慧苑の教学を再評価し華嚴教学史の中に位置づけた論文として著名である。ここでは「第二部 華嚴学の諸問題」「第二篇 華嚴教学成立に関する研究」の中で「第四章 新羅の義湘の教学」の章を設け論じている。

続いて1960年代に入り石井教道[1964]『華嚴教学成立史』(石井教道博士遺稿刊行会)が出る。これは1951年に「華嚴学成立考」として大正大学に提出した博士論文を著者没後に刊行したものである。この中には韓国華嚴に関する項目はないが、石井教道が韓国華嚴研究に対して熱い情熱を抱いていたことが、生前に交流があった塚本善隆の刊行序から窺うことができるため²、ここに掲げることとした。

④ 1970年代

続いて1970年代には、その後半に、以後の日本の韓国華嚴研究が促進される重要著書の刊行がある。それは金知見[1977]『均如大師華嚴学全書』(韓国では1973年に出版)である。本書は高麗均如の著作と解題を付したものである。1900年初頭にその所在が初めて報告された海印寺蔵の高麗大蔵經補版に収録された均如の著作は、それ以後に刊行された『大正新脩大蔵經』に収録されなかったため、本書が刊行される以前には補版からの印

² 石井教道[1964]塚本善隆の刊行序「かつてわたくしが中国への旅行の途で京城に滞在していた時にこられた先生は朝鮮に於ける華嚴教学資料の蒐集に東奔西走、その思いがけぬ豊かさに夢中になって仕事をつづけられた。その情熱を華嚴学へ傾斜される学者の姿は、今もわたくしの忘れられぬ想い出である。先生はよくいわれた。極東における華嚴教学の発展に重要な地位を占める朝鮮華嚴の究明が未だ果されていない。朝鮮華嚴資料を整備研究して華嚴教学の発展史の全貌を明らかにするのが今日の華嚴学者の使命だ。それをやってみよう。」p.i

出本でしか見ることができなかった³。そのため少数の研究者しか利用することができなかったが、本書の刊行によりそれが容易になった。これを契機として、中国華嚴思想研究の大家である鎌田茂雄を中心として、均如が法蔵の『五教章』に注釈を施した『釈華嚴教分記円通鈔』の講読会が開始され、その成果が公表されるようになると、日本の華嚴学研究者の多くが韓国華嚴に目を向けることとなった。後述する吉津宜英、石井公成、小島岱山、中條道昭もこの講読会のメンバーであった。

さらに『均如大師華嚴学全書』刊行の翌年である1978年には、金知見を中心として大韓伝統仏教研究院が主催した韓国仏教に関する国際学術会議が開かれる。これは韓国と日本を中心とする仏教学者による学術会議で、第一回の会議の主題が均如であった。その時の日本側の発表者は古田紹欽、鎌田茂雄、木村清孝などである。この学術会議はその後20年近くの長きにわたって行なわれる⁴が、その過程で韓国と日本の仏教学者の交流が活発となり、日本での韓国華嚴研究が促進される土壌となったといえる。こうした意味から、1970年代後半は日本の韓国華嚴研究の大きな転機と言えるであろう。

⑤ 1980年代

次いで1980年代に入ると鎌田茂雄が鎌田[1983a]『華嚴学研究資料集成』を刊行する。本書は鎌田[1960]「華嚴学の典籍および研究文献」を増補したものであり、日本・韓国・中国・欧米の華嚴学の研究状況を網羅した

³ 海印寺の高麗大蔵經の発見・報告にはじまる、日本での高麗大蔵經をめぐる議論については、本誌「高麗時代の仏教に対する研究」の大蔵經に関する項目を参照のこと。

⁴ これまで開催された12回のテーマと開催年は次の通りである。第1回「均如大師と華嚴思想」(1978年)、第2回「元曉思想」(1979年)、第3回「義湘の華嚴思想」(1980年)、第4回「華嚴思想と禪門」(1981年)、第5回「アジア仏教の源流」(1982年)、第6回「知訥の思想」(1984年)、第7回「西山の思想」(1986年)、第8回「元曉聖師の哲学世界」(1987年)、第9回「『六祖壇經』の世界」(1989年)、第10回「アジアにおける華嚴の位相」(1991年)、第11回「羅・唐仏教の再照明」(1993年)、第12回「道説の再照明」(1996年)

重要な書物である。本書において鎌田は韓国華嚴研究の重要性を述べ⁵、「七新羅高麗華嚴宗の典籍」という項目を設けその中で参考資料として体元『白花道場発願文略解』、体元『華嚴經親自在菩薩所說法門別行疏』、『華嚴礼文』を収録している。さらに鎌田は[1983b]『華嚴の思想』を刊行し、「第四章 華嚴思想の流れ」の中に「1 新羅の華嚴」の項目を設けている。本書は一般読書人向けの書物であり学術論文ではないが、一般の人々への韓国華嚴に対する啓蒙を行なったという意味で重要である。続いて鎌田は鎌田[1988]『新羅仏教史序説』を刊行する。これは将来的に朝鮮仏教史を書くための序説とあり、その半分を新羅義湘の伝記の研究に充てている。

⑥ 1990年代

1990年代には、華嚴教学史の中で本格的に韓国華嚴を位置づける研究が出る。その代表的な研究としては1991年に刊行された吉津[1991a]『華嚴一乗思想の研究』と1996年に刊行された石井公成[1996]『華嚴思想の研究』である。これらは単純に従来の華嚴教学の流れに韓国華嚴を接着させたものではなく、中国の華嚴教学自体の捉え直しを行いながら韓国華嚴を位置づけていくところに特色がある。

まず吉津[1991a]『華嚴一乗思想の研究』は、法蔵の華嚴教学の中、一乗思想に焦点を当て、法蔵の前後の華嚴宗の人物、ないし華嚴宗以外の人物との対比を通し、その特色と後代への影響を明らかにしたものである。この中では吉津自身が韓国華嚴の位置づけに努めたと述べているように⁶、

⁵ 鎌田[1983a]「序」また、最近の華嚴学は、中国、日本の華嚴学だけでなく、新羅の義湘や、高麗均如の華嚴学についても強い関心が持たれつつある。義湘については近く大著を刊行する予定であり、高麗均如についてはすでに「釈華嚴五教章円通鈔の注釈的研究」(中略)が刊行されている。本書においてもこのような学界の趨勢にかんがみ、『大正新脩大蔵經』や『大日本統蔵經』に収録されていない、韓国の華嚴思想史研究の重要な資料となり得る「白花道場発願文略解」一卷、「華嚴經親自在菩薩所說法門別行疏」二巻、「華嚴礼文」一卷、なども重要資料として収録した。」pp.i-ii

⁶ 吉津[1991a]「序論」「一 研究の範囲」特に本書においては法蔵が影響を受けた人々としても、また法蔵が影響を与えた人々としても、新羅・高麗系の学僧たちに多くのスペースを与えたことを力説しておきたい。これらの人々の中で義湘と均如を除

義湘、均如、元曉、義寂、勝莊、太賢らが取り上げられ、それぞれが思想的な流れの中で位置づけられるほか、日本仏教に与えた影響までが指摘されている⁷。

続いて石井公成 [1996] 『華嚴思想の研究』は、中国・韓国・日本と広い領域を扱い、また、その手法は、従来仏教学で自明と考えられていた枠組みを再検討しながら⁸、様々な新たな提案を数多く行っている。その中で

いて、他の人々は華嚴の法統に属するという意識を持っているかどうか不明であったり、はっきりと他の学派に所属すると明言しそうな人々ではあるが、法蔵教学との関連は無視できないものがあり、ある場合には批判的に、またある場合には受容的に法蔵教学に関与する。それらは円測 (六一三—六九六)・元曉 (六一七—六八六)・義寂・勝莊・太賢・表員・見登、そして均如などの人々である。特に太賢以下の人々は法蔵の影響を受けた人々であり、その教学の流れは日本の南都仏教にも影響を及ぼしていると思われる、そのため日本の善珠 (七二三—七九七) や寿璽、さらには最澄 (七六七—八二二) にも言及することになる。」p.5

⁷ 「第一章 智儼の同別二教論」は智儼の教判の特色を同別二教と認定し、かつこれが法蔵の「別教一乘優越論」とは異なるものとして論じられているが、この中で「第五節 義湘の教学と同別二教」が挙げられている。そこでは義湘の教学が大体は智儼と同様なものとして位置づけられるが法蔵の教学の先駆けとなった部分もあると位置づけられる。「第六章 一乗義の展開と別教一乘」では法蔵の一乗義の特色を、法蔵以前の淨影寺慧遠、天台智顗、三論吉蔵、慈恩基と、法蔵以降の慧苑、李通玄、澄観、宗密ら華嚴諸師との一乗義との対比を通して述べているが、ここで均如の頓円一乗義が取り上げられている。「第七章 『大乘起信論義記』の成立と展開」は、法蔵の『大乘起信論義記』の特色と後代への影響について述べるものである。ここでは「第三節 法蔵の『義記』撰述とその意図」において法蔵との関連において元曉が問題とされ、「第四節 『義記』の後代への影響について」では、「三 太賢疏と元曉・法蔵融合形態」として、太賢、表員、見登を元曉の教学と法蔵の教学とを融合させた形態の教学と捉える。さらにその融合形態の日本への伝来を取り上げ、新羅の教学が日本仏教に与えた影響にまで触れている。「第八章 法蔵の『梵網經疏』の成立と展開」では、「第一節 法蔵以前の『梵網經』諸注釈書」として元曉、義寂、勝莊が取り上げられ、「第三節 法蔵以後の諸注釈書」では、太賢が取り上げられている。

⁸ 従来の仏教史観に対する見解と、韓国仏教に対する見方は次のように説かれている。石井公成 [1996] 「はしがき」 「だが、研究を進めるにつれて、そうした問題意識自体、

も重要なのは、南北朝時代に流行してたが現在伝わっていない地論宗文献の整理を通して、地論宗の様々な類型を明らかにしていることである。中でも『華嚴經』を至上とする地論宗の存在が智儼の華嚴思想形成の一因とみるほか、いろいろな地論教学が新羅にも伝来しており、義相も影響を受けていたと指摘することである。また義相の思想から同時代の東山法門に対する批判を読み取るなど、華嚴思想の研究とはいいいながら、いわば縦の面での思想史、横の面での思想の交渉などの複合的な関係を明らかにしている。

また最近の研究としては、未刊ではあるが、1998年に東洋大学に博士論文として提出された佐藤厚 [1998c] 『新羅高麗華嚴教学の研究—均如『一乗法界図円通記』を中心として—』がある。本書は上述した吉津や石井のような幅広さを持たないが、新羅の義湘から高麗の均如にいたる華嚴教学の展開を、日本と韓国での研究状況を踏まえながら跡付けようとしたもの

伝統的な仏教学に縛られたものにすぎないことに気づくようになった。小さな点については従来の説を訂正しえたとしても、華嚴宗という「宗」の存在を前提とし、中国・朝鮮・日本における展開の仕方を研究するのであれば、「宗」を柱にして仏教東漸の道すじを跡づける伝統的な仏教学と変わらないのである。その伝統的な仏教学を大成したのは、日本に伝わった諸宗の歴史を柱として仏教史を構築し、インド・中国・日本という三国仏法伝通の図式を確立した凝然であった。杜順が創始したとされる華嚴宗の歴史を三国伝通の図式に基づいてまとめたのも凝然であり、澄観と法蔵の教学を折衷することによって伝統的な華嚴教学を作り上げたのも凝然である。しかし、凝然が三国伝通の図式から除外した朝鮮半島の僧は、実際には仏教伝通において大きな役割を果たしたばかりでなく、逆に中国仏教に影響を与えてさえいる。入唐して智儼に師事し、同門の後輩たる法蔵と親交を重ねていた義湘や、入唐せずに新羅の地で膨大な著作を著わした元曉が、法蔵に大きな影響を与えているのはそうした例の一つである。しかも、法蔵は、康居 (ソグディアナ) 系の三世であって純粹の漢人ではないうえ、法蔵に影響を与えた近い世代の学僧のうち、三論教学の大成者である吉蔵は安息 (パルチア) 系、唯識研究の大立者であった円測は新羅出身、法相教学の確立者である基は于闐 (コータン) 出自の尉遲氏であった。つまり、華嚴教学は、当時の東西交流の気運の中で育っていった教理なのである。」pp.i-ii

である⁹。

さらに、これも未刊であるが、金天鶴[1999]『均如の華嚴一乘義の研究—根機論を中心として—』がある。これは、韓国の精神文化研究院に提出された博士論文であり、日本人あるいは日本において刊行された研究ではない。だが、日本での留学成果に基づき、日本と韓国の研究状況を把握した上で上梓された論文であることからここに紹介することとした。本書は均如の教学を根機論（日本で言う機根論）に焦点をあてて、その一乗義を検討したものである¹⁰。

⁹ 内容を簡単に紹介すると次のようになる。全体は研究篇と資料篇との二部構成からなる。研究篇は「第1篇 均如の『法界図』解釈の背景」と「第2篇 均如の『法界図』解釈」からなる。第1篇はさらに「第1章 『一乘法界図』の教理構造と思想的地位」と「第2章 義湘系華嚴教学の問題群」とからなり、第1章では『法界図』の教理構造を中道と二辺という枠組みで捉え、そこから智儼・法蔵との関係を問題とする。続く第2章は、義湘と均如との間に位置する人物・文献を均如文献と『法界図記叢録』から収集し、その前後関係を考察するとともに、教説内容を検討し、それら義湘と均如との間の人物が華嚴教学の中でどのような問題を議論していたのかを整理したものである。続いて第2篇は「序章 均如の伝記をめぐる諸問題」、「第1章 『一乘法界図円通記』について」、「第2章 『華嚴経』観一教判論—」、「第3章 中道と無住」、「第4章 六相論—『十地経論』加の所為の解釈—」、「第5章 尽不尽をめぐる問題」の5章からなる。序章は均如の伝記について検討を加え、第1章は均如の『一乘法界図円通記』の特色を『叢録』に収録される均如以前の注釈との関係で明らかにする。第2章は所謂の教判論を扱い、『法界図円通記』で示された均如の教判論を均如以前の注釈書の教判論との関係で検討し、その同異を明らかにすることにより新羅華嚴の中での均如の位置、すなわち伝統を継承する面と継承しない面とを浮き彫りにする。第3章、第4章、第5章も、それぞれの主題で均如とそれ以前の注釈との関係を問題とする。総じて均如が義湘系の流れに関わりながら、独自の問題意識で処理していたことを明らかにする。また、資料篇として、1)新羅高麗華嚴学逸文集成、2)『一乘法界図円通記』訳注研究3)『法界図記叢録』訳注研究として『法記』・『真記』・『大記』の訳注研究を行なっている。

¹⁰ この研究は、Ⅰ.序論、Ⅱ.均如の華嚴学解釈の基礎、Ⅲ.均如における機根論の根拠、Ⅳ.均如の機根論の展開、Ⅴ.結論、の5章からなっている。この中、教判の問題を扱うⅡは「1. 三教判と頓円一乗の成立」、「2. 同別二教の構造と同教論」からなり、華嚴

(2) 小結

以上をまとめると次のことが言える。

第一に、日本の華嚴学研究の中での韓国華嚴学の位置づけの変化をまとめると、1910年ころから暫くは義相、元曉などは伝統五祖に対する傍系との位置づけであったが、1930年代、40年代になると、一応は五祖とは相対化され独立した形で研究の対象となる。その後、暫くして1970年代になると、金知見の典籍刊行により日本での韓国華嚴研究の土壌が整備され、また鎌田茂雄の活躍により韓国華嚴のみならず朝鮮仏教自体が日本の学界の中で一つのジャンルとして認知されるようになる。次いで木村清孝、吉津宜英、石井公成らにより個別の研究が進展するとともに、それぞれの立場から韓国華嚴が東アジアの華嚴思想の中で位置づけを与えられるようになる。

第二に、この流れは、一面では韓国華嚴、ないし韓国仏教自体に固有の価値を見出していくことであるが、同時にそうした動きは華嚴学研究の質的な変化と連動している。すなわち「五祖説」に代表される日本の伝統的な華嚴の祖統説の考え方が解体されていくことである。つまり、最近の研究では、伝統五祖の価値を無意識的に是認したまま個別の研究に取り組むのではなく、もちろんそれらの人物の功績は認めつつも、それに入っていない人物についても公平に扱い、教説の一つ一つを吟味していくことにより、思想の展開を跡付けるといふ、言わば当たり前のことであるが、そのような方向で研究が進行しているということである。このことから、韓国華嚴研究の流れは、中国華嚴の見直しの作業とともに進んでいるといえる。

の教判の中でも均如が特徴を示す三教判と二教判について、①中国の華嚴、②均如以前の韓国華嚴、③均如という思想史の流れに沿いながら考察する。Ⅲは、副題にある機根論と直接関わる問題として、「1. 説経時と説経処論」、「2. 経の対象論」、「3. 『法華経』に関する新たな認識」を検討する。Ⅳは、機根論の展開の問題として、「1. 海印三昧論の展開」、「2. 所流・所目論の展開」、「3. 二乗廻心論の展開」、「4. 三乗極果廻心論」を取り上げる。

3. 新羅・高麗代の華嚴の系統に関する研究

韓国華嚴に対する研究は、個々の人物に対する研究が進展する中で、1970年代からは新羅華嚴の人物を繋ぐ系譜を構築する方面にも進行する。本章では、各時代ごとの個別の議論に入る前に、新羅・高麗の華嚴について、どのような思想史が描かれているかをまとめる。なお、ここで朝鮮時代が外れているのは、思想史を描く際の材料が、高麗中期ごろまでしか存在しないことによる。

(1) 系統構築に用いられる主要な資料

まず学説を紹介する前にそれらが多く依拠する資料を概観する。後の論述の便宜上、資料に【A】から【H】までの記号を付し、後にはこの記号によって資料を表示することとする。

【A】元曉の著作・教学

【B1】義湘の著作・教学

【B2】義湘の伝記記事

義湘が唐より新羅へ帰国した後、直弟子に法を伝えた記録が残る。これを【D】と連結することにより、直弟子から何世代かの系譜を復元することができる。

【C】太賢・表員・見登の著作・教学

この三者を並べるのは【H】による。

【D】『法界図記叢録』

高麗時代に成立したと考えられる文献。内容は『法記』・『真記』・『大記』という3種の『法界図』に対する注釈を中心とし、それに関連する中国撰述あるいは朝鮮撰述の文献を加えたもので、『法界図』の注釈集成といえる文献。ここには、義湘から直弟子への説法、直弟子から孫弟子へなど、義湘から続く系譜を想定することのできる記述が断片的に収録されている。よって、【B2】と合わせることで義湘の系譜が構築される。これを最

初に行なったのは韓国の金相鉉〔1984〕である。

【E1】均如の伝記

均如に対する伝記は1075年に赫連挺により著わされる。内容については後述するが、この中で系統に関する記述としては、均如の師承が希朗—義順—均如であること、新羅末に海印寺の華嚴が、観恵を祖とする南岳派と希朗を祖とする北岳派に分裂し、争っており、均如は北岳派に属するという記録がある。

【E2】均如の著述・教学

均如の著作はすべて智儼・義湘・法蔵の三者の著作に対する注釈である。また、内容的に教判が華嚴至上であること。

【F】義天『大覚国師文集』

『大覚国師文集』の中に義天が均如を名指しで批判する記述がある。ここから批判の背景に義天と均如の思想の違いがあるとの推測ができる。

【G】廓心『円宗文類集解』巻中

廓心は義天の系譜に連なる人物であり、本書は義天が編纂した華嚴学のアンソロジーともいえる『円宗文類』への注釈の一部である。

【H】著者不詳『華嚴宗所立五教十宗大意略抄』

日本で成立した著者不詳の『華嚴宗所立五教十宗大意略抄』（大正蔵72）の末尾に華嚴宗祖師として「普賢菩薩 文殊菩薩 馬鳴菩薩 龍樹菩薩 堅恵菩薩 覺賢菩薩 日昭菩薩 杜順菩薩 智儼菩薩 法蔵菩薩 元曉菩薩 大賢菩薩 表員菩薩 見登菩薩 良弁菩薩 実忠菩薩 世不喜菩薩 総道菩薩 道雄菩薩」という菩薩名を列べているが、その中に傍線部で示した新羅の人物が四人並ぶ。この記述が何らかの新羅の学系を示すのではないかと推測ができる。

以上の【A】から【H】までの資料の中、【A】から【D】までがほぼ新羅時代をカバーする材料であり、【E1】から【G】までが新羅末から高麗時代の動向を理解するための資料となる。また、【H】は日本で成立した文献であるが、中に新羅の人物が描かれるため、新羅の流れを考える際の材料となる。

(2) 系統に関する諸説

この研究には、韓国では金知見[1973]、崔柄憲[1980]、金相鉉[1984]、高翊晋[1989]、金福順[1990]などがある。日本では、高麗時代を中心に考えるか、新羅時代を中心に考えるかの別はあるが、下記のような説が出されている。

① 李永洙[1973]〔北岳浮石寺系と南岳華嚴寺系〕

均如の伝記の研究である李永洙[1973]は、【E1】『均如伝』の南岳派・北岳派が対立していたという議論に着目し、その背景を新羅時代に溯って考察する。結論として、北岳浮石寺系と南岳華嚴寺系との二つの流れを次のように構想する。

北岳浮石寺系 = 義湘—法融—神琳—決言—希朗—義順—均如

南岳華嚴寺系 = 烟起(縁起)— ~ —観恵

両者の教学の違いは、北岳浮石寺系は華嚴学に専念した系譜であり、南岳華嚴寺系は『華嚴経』と『起信論』の兼修であったとする。

② 吉津宜英[1986]〔元曉・法蔵融合形態〕

吉津[1986]では、【A】に基づき元曉の一乗思想を「和諍一乗」と呼び、これが法蔵の別教一乗優越論とは立場を異にするものであり、故に法蔵が批判を加えたことを述べる。このように元曉と法蔵とを対極的な思想家として捉えた上で、それを融合させていく流れとして元曉以後の人物を見る。その考察のヒントとなったのが、【H】に記される「元曉菩薩—大賢菩薩—表員菩薩—見登菩薩」の四人の新羅の人物である。

吉津はこれを、新羅の華嚴教学の一つの流れが日本に伝わったことを示し、その内容は元曉と法蔵との両教学を融合したものであったと捉える。これを【D】〔太賢の『起信論内義略探記』、表員の『華嚴経文義要決問答』、見登の『大乘起信論同異略集』〕の分析を通して論証する。さらにこ

の融合形態が日本に伝来した証拠として【H】『略抄』の教説内容を検討し、【D】の三者の教学と通ずることを論ずる。

③ 佐藤厚[1994]〔義湘系を思想的に実証〕

佐藤厚[1994]は『法界図』の注釈の流れの中で、均如の位置づけを試みたものである。【C】『叢髓録』に収録されている『法記』・『真記』・『大記』という三つの『法界図』注釈書と【E】均如の『円通記』を比較し、均如がそれ以前の注釈書を参照していることを文献的に明らかにし、中でも特に「大記」を下敷きとしていることを論証する。これは、それまで明確には指摘されていなかった義湘から均如に至る流れを文献的に明らかにしたものである。

④ 吉津宜英[1995]〔均如系華嚴と義天系華嚴〕

吉津宜英[1995]「廓心『円宗文類集解』巻中の研究」では【G】を解析し、1)法蔵と澄観の一体化、2)元曉への言及が多いという特徴を指摘する。特に2)については義湘への関説が無い分だけ逆に元曉への関心が目立つとする。次いで義天が均如を批判する【F】に着目する。そして【E2】から、均如は義湘の華嚴の伝統を中心にして華嚴のみを至上とする教学者と捉え、義天は諸宗融合的な思想を持っていたとする。これらから「均如系華嚴」と「義天系華嚴」との対峙を予想し、義天の法統に連なる人々は元曉に大いに依拠して諸宗融合の立場を打ち出し、均如派の華嚴独尊の立場を批判したのではないかと推測する。これを図示すると次のようになる。

均如系華嚴 = 義湘— ~ —均如

義天系華嚴 = 元曉— ~ —義天— ~ —廓心

⑤ 石井公成[1996]〔義湘系と元曉系の区別、その融合としての『釈摩訶衍論』〕

石井公成[1996]「第5章 新羅華嚴思想展開の一側面」「第一節『釈摩訶衍論』の成立事情」では、大乘經典を等しく尊重し、諸説の会通をはか

った元暁の系統と、『華嚴経』の優越を説く義湘の弟子たちという対立を認めつつ、両者の主張をともに取り入れている者たちも存在するとし、それを代表するものとして『釈摩訶衍論』を挙げている。このように、義湘系と元暁系という系統の違いはあるとしながらも、表記の仕方から、元暁系については系統といえるかどうかと疑問も提示している¹¹。

⑥ 佐藤厚〔2000〕：義湘系の教学と『起信論』批判、その延長にある元暁系批判

これは、【C】『叢髓録』所収の『大記』に記録される義湘と元暁の対論記事（『大乘起信論』の考え方が主題となっている）を手がかりとして、義湘系の思想の特徴に『大乘起信論』に対する批判があり、それが元暁ないしその系統を批判していた可能性を述べる。同じ箇所に対する論究は高翔晋〔1989〕によってなされているが、本論はそれを思想的に裏付けようとしたものである。

【C】や【E2】に引用される義湘系の文献の解析を通じ、その基本思想を、真理を具体的なものとして把握しようとする志向があることを述べ、それが「五尺」といった自分自身に諸法を具しているという表現と通底しているとする。反対にこの立場と対立するものとして、義湘系では真理を「一心」などの抽象的な原理として把握する考え方を批判する。それら批判の対象となるのは『起信論』を想定した教説である。もちろん、華嚴の立場から『起信論』の教説を批判するのは、いわば当然であるが、義湘系の文献には、中国の華嚴文献には見られない譬喩（湿過海・湿留海など）を用いて批判することから、義湘系には中国の華嚴文献よりも批判の鋭さ

¹¹ 石井公成〔1996〕pp.174-175「ただし『要決問答』（表員『華嚴要決問答』）には「暁云」という表記があることから知られるように、ここで言う元暁系とはあくまでも学系にすぎず、元暁を祖師とする宗派を意味するものではないことに注意すべきであろう。これは、義湘系が義湘とその師の智儼とを絶対視してほとんど常に「相和尚」「儼公」その他の尊称で呼び、特に智儼に対しては時には「儼尊者」「雲華尊者」などとまで称して尊崇しているのとは対照的である。」

があるのではないかと推測する。

ここから、義湘と元暁の対論記事の内容も、内容が関連する他の義湘系文献を併せて考察すると『起信論』と華嚴との差別化を行なっている議論であるため、義湘系の人物たちは『起信論』に批判的であり、かつそれが『起信論』を中心とした元暁、あるいは元暁の系統に対する批判ではないか、と推測する。

⑦ 小島岱山〔1992〕五台山系華嚴と終南山系華嚴

これは、今まで見てきたものとは異なり、中国華嚴思想に対する独自の見解から韓国華嚴思想を捉えようとしたものである。小島岱山〔1992〕は、中国の華嚴思想を五台山系と終南山系という二大潮流によって把握し、韓国華嚴思想は五台山系に属するという。その理由として、慈蔵は五台山系華嚴思想を受け継いだ人物であるが、実は韓国への華嚴思想の初伝も慈蔵が帰国した時点とするのが妥当だからである、と主張する。また、韓国華嚴思想の特徴とされる理理相即論（後述）も五台山系華嚴思想の影響下にある澄観には説かれており、均如の理理相即論は澄観の影響によるものであるとする。

4. 新羅時代の華嚴

本項では、新羅時代の華嚴に対する研究として、（1）義湘、（2）義湘の系統の文献と思想、（3）元暁、（4）表員、（5）『釈摩訶衍論』の成立に関する問題、の5項目を取り上げる。この中では、（1）義湘に関する研究が圧倒的に多い。

（1）義湘

① 名前の表記の問題

「義湘」の表記には、①義湘、②義相、③義想、という三種類が存在する。これらは韓国語の発音では同じ "Ui-sang" であることから、表記の仕

方の違いであることがわかる。これについて従来は異読の問題と考えられたため、特にこれ自体を取り上げる研究は存在しなかったが、金知見[1990a]は、混用される用例と原因を検討し、本来の法諱は義相であることを論じている。現在、この見解に対する異論・反論などは行われていない。

② 伝記

現在、義湘の伝記記事を伝える資料は、贊寧(919-1002)『宋高僧伝』巻四(釈義湘伝)、一然(1206-1289)『三国遺事』巻四(義湘伝教)を中心とし、それに多くの断片的な資料がある。この中で、義湘の全生涯を扱っている資料は『宋高僧伝』と『三国遺事』巻四「義湘伝教」であるが、両者は、俗姓・入唐記事などにおいて大きく記述が違っており、義湘の伝記を考える際、この資料の扱いが検討のポイントである。

義湘の伝記に関する研究は多いが、今述べた資料批判に優れたものとしては、八百谷[1939]と鎌田茂雄[1988]とを挙げることができる。八百谷[1939]は、その前年に出版された古田[1937]を批判的に考察し、『宋高僧伝』に代表される中国側が伝える義湘の資料と『三国遺事』などに代表される韓国側が伝える義湘の資料を比べ、韓国側の資料が歴史的により正確なものであると結論するとともに、中国側の資料の中心である、いわゆる善妙説話がどのように形成されたのかという背景までを考察の対象としており、現在でも参考になる研究である。

また、鎌田茂雄[1988]「新羅仏教史序説」は現在にいたるまで、日本での義湘の伝記研究で最大の量を誇るものである。そこでは「第二部 新羅義湘の研究」を設け、「第1章 修学時代」、「第2章 入唐留学時代」、「第3章 活躍時代」、「第4章 海東華嚴の形成」の4章に分けて、義湘の生涯の各段階で関わってくることがらを丁寧に考察しながら全体像を描こうとするものである。

また、伝記は教学からフィードバックされることもある。石井公成[1996]は、『法界図』の教学に地論の教学が強い点に智儼の教学との違いを見、そこから義湘が入唐前に地論教学を学んでいたことは十分考えら

れることであり、また、入唐した際も、ほとんどの期間を智儼のもとで学んすごしたのではなく、長安や終南山で地論系の僧などに師事した後に最晩年の智儼にめぐりあい、傾倒して集中的に学んだという可能性も否定できない¹²、と述べる。

このほか、金知見[1992]は、智儼、義相、法蔵の三者関係に着目し、史料を深く読み込むことで、華嚴の主流が智儼から法蔵に至るという従来の公式に疑問を提示し、智儼教学の正統性は義相が継承していることを述べる。

また、義相の華嚴思想と新羅王権との関連をめぐっては、従来、李基白[1982]、鎌田茂雄[1988]などの研究がその緊密な関係を認めてきた。しかし、金相鉉[1988]、石井公成[1996]、福士慈稔[1997]など最近の研究においては、それが否定され、義相と新羅王権との直接的な関連はなかったものと推測している。

③ 著作

現在、義相の著作と考えられるものには8種類存在する。この中、現存するものには、①『一乘法界図』(続蔵2-8-4, 大正45, 韓仏全2)、②『白花道場発願文』(韓仏全2)③『義湘和尚投師礼』(韓仏全11)、④『義相和尚一乘発願文』(韓仏全11)の4種がある。ただし、②は高麗時代の体元の『白花道場発願文略解』所引のものを抽出したものであり、さらに③、④は著作の真偽が明確となっているとは言い難い。続いて経録などには見えるが、現存しない著作には、⑤『入法界品抄記』、⑥『華嚴十門看法観』、⑦『阿弥陀経義記』、⑧『諸般請文』がある。

この8種の中、日本において研究がなされてきたのは主として①『一乘法界図』であり、1980年代になって②『白花道場発願文』が主として義湘撰述の真偽に関する問題が提起された。

さらに近年、従来は法蔵の撰述とされてきた『華嚴経問答』が義湘の語録とも言うべき著作であることが明らかになったが、これについては義相

¹² 石井公成[1996] pp.224-226

の弟子の項目で扱うこととする。

a. 『一乘法界図』

a-1 テキスト論

現在、大正蔵巻45に収録されている『法界図』のテキスト（「華嚴一乘法界図」）が善本とはいえないことは、木村〔1982〕¹³により指摘されてきた。これを承けて佐藤厚〔1994〕では、『法界図』のテキスト論を検討すべく、日本に現存する『法界図』の写本の調査を行うとともに、『法界図記叢髓録』（以下『叢髓録』と略称する）に収録される『法界図』のテキスト、および均如が引用する『法界図』のテキストの比較研究を行なった。その結果、『法界図』のテキストとして善本なのは『叢髓録』所収本であり、これに従って『法界図』の正式な題号も「一乘法界図合詩一印 五十四角二百一十字」であるとするのが妥当と考えられた。なお、『法界図』のテキスト論については、金知見〔1997〕が韓国において『叢髓録』所収本を底本として校合と翻訳を行なっている。また、この問題に関連する論点には金知見〔1997a〕がある。

a-2 房山石経本『法界図』の出現をめぐる問題

一般に、詩とそれに対する釈文とを合わせたものを『華嚴一乘法界図』と呼び、これは義相のものというのが定説であった。しかし、最近この定説に対する疑問が提示された。

姚長寿〔1996〕によると、詩に相当する部分が房山石経の華嚴典籍の遼金刻経に『一乘法界図合詩一印』として収められており、しかもそれは「僞法師造」、すなわち中国華嚴宗智儼のものとなっているという。そして、この報告は最終的に、「『大正蔵』本の『華嚴一乘法界図』は、義相が智

¹³ 木村〔1982〕「本書『一乘法界図』は、周知のように、大正大蔵経第四五巻（七一頁上～七一六頁上）に収められ、容易に見ることができる。しかし、残念なことに、大日本統蔵経から転載されたこの収載本は、誤字、もしくは誤読にもとづく改変ではないかと思われる箇所をかなり含み、善本とはいえないようである」p.11註7

儼の『一乘法界図合詩一印』を注釈したものである。現存する『法界図』のように印と釈文とが一本の体裁のものでは本来なかったことは、房山石経本によって明らかになった。法界図印は智儼の作であり、義相がそれを注釈したのが現存の『華嚴一乘法界図』である。法界図印を義相の作であるという従来の定説は修正する必要がある」と、結論する。

これに対して全海住〔1999〕は、房山石経の資料的価値が疑わしいことや、房山石経に刻印される以前に中国において『法界図』が流通したことがみられないこと、『法界図』の図印については義湘の直弟子の時代から注釈が行われていたことなどを挙げ、今後、新たな資料が再び発見されない限り、『法界図』が義相の作であることには変わりがない、と主張する。

b. 『白花道場発願文』

前述したように『白花道場発願文』（以下、『発願文』）は単独では存在せず、高麗時代の体元の『白花道場発願文略解』に注釈対象として引用されているものだけである。これは1935年の江田俊雄の報告によるものであるという¹⁴。その後、日本では『発願文』の研究は行われず韓国において研究が蓄積されてきた¹⁵。そこでは本書は義相の撰述であることは疑われない。

これに対して木村清孝〔1988b〕「『白花道場発願文』考」は、本書の義相作についての真偽問題を提起する。本論文は、1)義相作とみなされる根拠、2)『発願文』義湘作の問題点、3)『首楞嚴經』との関係をめぐって、の3項目よりなる。結論的には「内容の検討から、それが義相の作ではなく、後代に作られ、義相に仮託されたものであろう」と述べる。内容を概観すると、1)では本書が義相の作として認められてきた根拠、すなわち、体元の『白花道場発願文略解』の証言と、一見それを裏付けるようにみえる『三

¹⁴ 坂本〔1936〕p.117によれば、江田俊雄〔1935〕『現代仏教』昭和10年6月号により知り得た情報としている。

¹⁵ 木村〔1988〕p.747には、趙明基〔1962〕『新羅仏教の理念と歴史』、黄天牛〔1973〕「白花道場発願文」、蔡尚植〔1982〕「体元の著述と華嚴思想—14世紀華嚴思想の断面—」を挙げている。

『国遺事』の記事を取り上げ、これらの記事の信憑性に疑問を提する。続いて、2)では『発願文』の内容を検討し、『法界図』との関連、使用される用語の問題から、義相作とするには否定的な要素が見られると主張する。そのポイントの一つとなるのが『首楞嚴經』によりどこをもつ「円通」という用語であり、続く3)ではこの『首楞嚴經』の成立年代の考察を行なう。そして諸説を検討しつつ『首楞嚴經』を義相没後の成立とするのが妥当と見、故に義相没後に成立した經典が用いられる『発願文』は義相の真撰ではない可能性が大きいとする。

翻って『発願文』の作成年代と作者については、推定できる確実な根拠はないとしながらも「『発願文』は、新羅から高麗代における観音信仰の広まりと『大悲呪』の浸透の中で、『三国遺事』が記す洛山寺開創伝説の確立過程と呼応しつつ、義相を敬慕する観音信仰者によって九世紀以降、十三世紀末ごろまでに作られた。そしてそれが、また新たな、いわば華嚴主義的な独特の観音信仰の流れを生み出した」と述べる。

これに対して後に韓国の崔柄憲から質問や意見が提示され、それに対して木村[1994]「『白花道場発願文』再考」を発表する。ただ、これは前の論文と論旨は変わらない。

④ 思想

これまで縷々述べているように、義相の研究が本格的かつ総合的な形で遂行されたのは、坂本[1935]「新羅の義湘の教学(上)」、坂本[1936]「新羅の義湘の教学(下)」の一連の研究(構格を若干変更して坂本[1956]に再録)である。

この二つの論文の細目は次のようになる。

- 1) はしがき
- 2) 略伝
- 3) 著作
- 4) 教判論
- 5) 原理論
 - イ) 心識説

ロ) 三性三無性説

ハ) 理理相即 (以上、坂本[1935])

ニ) 十玄縁起

ホ) 六相論

6) 実践論

イ) 断惑論

ロ) 成仏論

ハ) 仏身論 (以上、坂本[1936])

以下、この枠組みに基づいて展開した議論をまとめる。

a. 教判論

坂本[1935]は、義相の教判について、必ずしも明瞭ではないとしながらも、智儼の五教の教判を踏襲していると見、『法界図』から円教・頓教・終教・始教の用例を出し、これに小乗教を加えると五教になるから智儼の五教判を継承していると述べる。次いで同別二教判についても『法界図』の用例を確認し、それを継承していることを述べる。また、漸教、頓教、円教の三教の用例を出した後、義相の教学においては頓教は終教よりも円教に近い関係を持ち、それは智儼の『孔目章』と同じであり、かつ法蔵が円と頓とを区別するのとは異なると述べる。

吉津宜英[1991a]は、義相の教判論が智儼を継承しつつも、より一乗を強調しているものと捉え、ここにおいて智儼から義相へ、義相から法蔵へという思想的な流れを確認しようとする。そもそも吉津は、智儼の教判論の中心は三教判であり、法蔵の教判論の中心を五教判と見る。このように智儼と法蔵とを区別する観点から義相を見ると、『華嚴經』の所摂に関しては智儼の規定通り三教判の中、頓教と円教に配しているところから智儼と同じであるとするが、一方では題号に一乗を冠するように、一乗を強調しようとする部分もあるため、法蔵の教判の先駆けともなっていると見る。

この吉津の見解に対して佐藤厚[1997]は、『法界図』の体系から見ると、六相こそが義相の教判思想の中心であると捉え、その視点から『法界

図』の教判を再検討する。すなわち、義相の教判は、一乗と三乗が中心となっており、それが教理的には中道と二辺との関係を構成し、『法界図』の図印が因果不同（三乗の見解）でありつつ因果が一体（一乗の見解）であることを説いているように、両者が並立する状況を問題にしている。そしてその関係は六相の総相と別相との関係を構成していることから、『法界図』の教判を考察する場合には、この点が中心となるべきであるとする。

b. 理理相即説

『法界図』の教説の中で「理理相即説」を最初に指摘し基礎的な解明を行ったのは坂本〔1935〕である。

『法界図』では断惑に関する問題に端を発し、三乗と一乗の違いについての往復問答を重ね、理と事との関係が問題となる。そうした中、別教一乗では理と事との関係は次のように述べられる。

若依別教一乗。理理相即亦得。事事相即亦得。理事相即亦得。各各不相即亦得。何以故。中即不同故。亦有具足理因陀羅。及事因陀羅等法門故。

『法界図』（大正蔵45・755中）¹⁶

これは、別教一乗では①理理相即、②事事相即、③理事相即、④各各不相即、という4種の組み合わせが可能であることを説いている。

この箇所について坂本〔1935〕は次のように論を進める。まず、この4種の中、②事事相即、③理事相即、については法蔵以後盛んに用いられ、殊に事事相即を談ずることは華嚴学の誇りとする処であると述べる。ただ智儼においてはこれらの用語は見当たらないようだが、『孔目章』巻二の一文を引いて智儼にも同種の思想が存在したという。

これらに対して理理相即に至っては華嚴教学史上、全く特殊の思想に属し、義相の教学の中でも最も異採のある学説と言わねばならぬという。

その理由は、理理相即が成立するためには「理の差別」を前提としなければならないが、一般華嚴学に於いて理は一味平等無分斉とされているからであるという。その例として、理に分限差別を認めることは過失と

¹⁶ これは『法界図記叢録』所収本『法界図』の頁・段

されている法蔵『華嚴旨帰』、澄観『華嚴経疏』玄談の所説¹⁷を引く。これは智儼では明文は見出せないとしながらも、大体において理を無分斉のものと見ていたという。

だが、智儼においても理に差別を認めていた例として『一乗十玄門』（この当時は智儼撰述が疑われていない）を検討し、これにより智儼にも理理相即の考え方が存在していた義相がその思想を承けたのではないかと推測する。

以上の坂本の議論を整理すると、理の捉え方に関して、智儼の段階で①差別、②無分斉という二つの考え方が存在し、前者を義相が継承し、後者を法蔵そして澄観が継承したということになる。

1980年に韓国で開かれた第三回国際仏教学術会議においてRobert Gimelloは、如上の坂本の考察を踏まえ、Robert Gimello〔1980〕「The Meaning of 'Li' in the Thought of Uisang」（義湘思想における理の意味）を発表¹⁸し、さらに1981年に開かれた第四回国際仏教学術会議では、韓鐘萬が「華嚴思想と禪門形成」という発表を行なった¹⁹。

さて、これら坂本幸男、Robert Gimelloの問題提起を承けた木村〔1982〕「韓国仏教における理理相即論の展開」は、まず義相の『法界図』の理理相即が説かれる部分を確認し、次いで『叢録』や均如の文献での解釈を検討し、結果としてそれらが義相の存在観・真理観の本旨を捉える上では参考にならないとする。そして再び『法界図』に戻り、義相が究極的な事実を理事渾然一体なものと見ており、反対に義相においては理や事と呼ばれるときには、それらはすでに究極的な事実から離れたもの、それぞれに事実の一面を対応的な形で抽象化したものにすぎないと考察する。

¹⁷ 法蔵『華嚴旨帰』（大正蔵45・595中）、澄観『華嚴経疏』（大正蔵35・517上）

¹⁸ その要旨は、第一は、坂本の提起した問題を華嚴学一般に広げて、華嚴学における理の意味を考察すべきという提案。第二には智儼の教学における理の意味を考察すべきという提案である。

¹⁹ その中で理理相即説に触れ、「観念的論理の相即ではなく、理と理が互いにおのの役割をはたす実践的相即である」と指摘したという。これは木村〔1982〕p.2に基づく。筆者は韓鐘萬「華嚴思想と禪門形成」は未見である。

さて、坂本以来の諸説を踏まえながら、石井[1989]→[1996]「理理相即説の形成」は、この問題を思想史的な枠を拡大して捉える。

本論文は、1)はじめに、2)義湘の理理相即説と智儼の教学、3)理理相即説出現の背景、4)『法界観門』との関連、5)仏陀三蔵と初期地論宗の理理相即説、6)浄影寺慧遠の六相説、7)結論、の7項目からなる。2)では、『法界図』で理理相即が説かれる文脈を確認した後、これが義相独自の思想ではなく、智儼の晩年の作である『五十要問答』にも、理事の根底に法界を置く例が見られるとする。3)では、理理相即をめぐる義相の主張が、智儼に淵源するのにも拘らず、智儼には術語としてはっきりと打ち出した例がない理由を考察する。そして相即のあり方に対して義相が明確に論ずる契機となったのは、『法界図』原文にある「有人」の批判であろうと推測する。次いで『華嚴経問答』に記される「五門論者」がそうした人達だったのでないかと述べる。石井により義相系文献であることが明かされた『華嚴経問答』では、智儼の別教一乗普法と五門論者との思想の区別が議論され、その中で両者の類似性を認めながら区別を行なっているところから、華嚴宗と思想的に類似した人達との差別化が問題となっていたという。なお、五門論者とは、敦煌文献に断簡が残る『大乘五門実相論』、『大乘十地五門実相論』の著者、ないしは類似した名の書においてこれらと同様な主張を展開していた者ないし者たちを指すとし、また新羅に留学して奈良朝に初めて『華嚴経』を開講した審詳の著書のうちに『五門実相論』の名が見えることから、そうした主張がかなり流布していたことを示すという。4)では、『法界観門』の理事無碍観の理と『法界図』の理とでは性格が異なることを述べ、『法界観門』のような不可分の理の形成過程を問題とする。そこで法蔵の著作を調査し、『五教章』にはなく、『五教章』以後の作と考えられる『三宝章』においては『法界観門』には見えても智儼や義相には見えない「真理」「全事之理」「全理之事」その他の重要な語があちこちに分かれて見えるほか、理事分無門では理が「無分限」であることも説かれるという。次いで『華嚴旨帰』では「無分限」という点だけが強調されるようになり、その後、慧苑においてはそうした傾向が強まり、澄観に至って四種法界説の確立を見ることになるという。

ここから理理相即の思想については不可分の理を強調する『法界観門』以外にその先蹤を求めなければならない、とし、5)では、仏陀三蔵、『華嚴経両卷旨帰』、法上の『十地経論義疏』を挙げ、6)では浄影寺慧遠の六相説にその淵源を求めている。

また、最近の研究として、大竹晋[1999a]は、義相の理理相即と法蔵系の人物によるものと思われる『花嚴止観』の理理円融とを比較し、その関係を究明したものである。そこでは、理理相即は円教の無尽の理の相即であるのに対し、理理円融は法界が一なる理として融け合うことに他ならず、したがって理理相即と理理円融とは別である、という。

c. 三性説

『法界図』の三性説については、早く坂本[1936]が三性三無性説の項目を設けて研究していることは前述した通りである。

大竹晋[1999b]は、初期華嚴教学における三性説の展開をインド唯識学の観点から考察し、後づけようとしたものである。ここでは、智儼・義相・法蔵の三性説が、真諦訳の三性説を継承するものであり、またそれが一貫して智儼の用いる真諦訳の三性説の解釈法である「行三性」と「解三性」の枠組みの中にあったことが論証される。本研究は、中国の仏教思想をインド仏教との繋りを重視しながら解明するという、決して容易ではない方法を取っている点からも評価される。

続いてd.以下は、坂本の枠組みとは異なる視点での『法界図』研究を述べる。

d. 中道と二辺の枠組み

まず佐藤厚[1996a]は、『法界図』の「中道」という概念に着目して『法界図』を読み直している。すなわち、『法界図』全体を貫く論理は、一乗と三乗との対比であり、それが内容的に「中道」と「二辺」という、相対法の認識の仕方の差になるという。そして相対法とは、具体的には因果、証教、理事、三性説、数銭法などに見られることを確認している。

e. 華嚴観法

陳永裕 [1995] 『華嚴観法の基礎的研究』は、華嚴観法という立場から『法界図』を考察する。義相の華嚴観法の中心として「縁起実相陀羅尼法」、および義相の信仰活動として華嚴思想に基づいた華嚴信仰に着目して検討を進める。そして、その特徴として実践重視の信仰的性格を浮き彫りにしている。

f. 初期禅宗や地論教学との関連

石井公成 [1994] は『法界図』の形式、批判の対象などの問題に考察を加える。そこでは「真性偈」など初期禅宗との思想的親近性や、地論教学からの影響などを指摘するとともに、『法界図』が批判の対象としているのが、東山法門や如如無碍を説く人であったことを指摘する。このような観点から智儼の思想に対する義相思想の独自性を見出そうとする。

⑤その他—『華嚴五教章』の伝承をめぐる問題—

法蔵の『五教章』にはテキスト論に関する問題が存在する²⁰。これは天平年間に日本に伝来した、いわゆる和本と、趙宋の注釈家たちが使用し、治承年間に伝えられた宋本との二つのテキストにおいて、いずれが正本であるかが問題となってきた。これらの間には字句の違い、題号の違い、列門の違いがある。この和本・宋本という呼称は凝然以来の日本の華嚴宗において用いられたものである。

これに加えて均如の『釈華嚴教分記円通鈔』には別の伝承を伝える。それは、古来から草本と鍊本との二種類のテキストがあったとするものである。法蔵は義相に手紙を送り、その際に一緒に送った『五教章』をはじめとする著作についてその可否を訪ねている。均如の証言によれば、その際、義相が改訂を加えたという。そして改訂前のテキストを草本と呼び、改訂

²⁰ これについては吉津 [1991] 「第三章 法蔵の別教一乗優越論」 「第二節 『華嚴五教章』のテキスト論」 pp.178-208に詳しい。

後のテキスト（均如はこれを注釈していることになる）を鍊本という。

日本では凝然以来、和本をもって原著とし、宋本は後代の再治であると考えられてきた。ところが、金知見 [1971a], [1973b] では、前の均如の証言根拠として、宋本こそが原著者法蔵の著述のままであり、和本は義相が手直したものである、と主張した。

これに対して結城令聞は反論し、結城 [1976] 「華嚴五教章に関する日本・高麗両伝承への論評」は、均如の主張、すなわち義相が『五教章』を改訂したという主張そのものに疑問を提示し、金知見の説に反論する。結城は、浄源の「重校序」が日本の伝承と合致した見解を示していることなどを反論の根拠とする。このほか結城は、結城 [1978], 結城 [1983] などを著わす。

これらの議論に対して吉津宜英も独自の観点から接近を試み、吉津 [1978] を著わし、法蔵教学との関連から『五教章』のテキストの問題を捉えている。

(2) 義相の系統の文献と思想

① 文献

a. 『華嚴経問答』の著者をめぐる問題

現在、大正蔵経45巻に収録され、性起や縁起の問題について深い考察を加えている『華嚴経問答』は、一般に法蔵のものとして伝えられてきた。しかし、本書の著者をめぐる論争は古くからあり、その経緯は鎌田茂雄 [1959] によって紹介された。また、吉津宜英 [1983] 「縁起と性起一訳経から教学形成への一視点」は、本書は智儼の影響の下に新羅で編纂されたものであるとし、新羅撰述の可能性を示唆した。

石井公成 [1996] は、これを踏まえて本格的に本書の成立事情と意義、本書の及ぼした影響などを考察する。そして、①文体と用語の特徴、②義相の思想との共通点、③『釈摩訶衍論』との思想的関連などの点から、本書は法蔵のものではなく、義相の系統と関係が深いと指摘する。すなわち、その調査によると、本書は中国の学僧の文章とは思われ難い漢文になっており、その中には義相の弟子たちの筆録とほとんど同じ文句が見え、また

義相特有の用語が多く見られるなど、義相系統の人との関連が考えられるという。

思想の面からも、智儼や法蔵にはなく、むしろ義相の思想と共通するところが見出されるという。三乗人は成仏した後になってようやく一乗へ廻入するという極果廻心の問題や方便を重視して「返情」を説いていることなどがそれである。このような調査に基づいて石井は、吉津の主張する本書の編集と法蔵の著作との関連性に対しても否定的立場をとり、本書に法蔵の影響は見られないとしつつ、新羅撰述を積極的に主張する。

② 思想

a. 重層的教理解釈

佐藤厚[1998b]は、義相系の文献から一つの共通する論理形態を見出し、それを「重層的教理解釈」と名付ける。これは相対する華嚴の教理概念を重層的に解釈することをいう。この重層構造が、『華嚴経』を深めていく過程となっていることをいう。その例としては、『十句章』第三句に現れる五重の教義、質応の説いた十種の一乗三乗、『古記』に説かれる九種の同教別教などを取り上げる。そしてこの論理形態に共通するのは、「義相系の教学が『華嚴経』の根原への遡及志向を有していること」と推定する。理解の便のために、質応の説いた十種の一乗三乗、『古記』に説かれる九種の同教別教を図表化し例示する。

質応の説いた十種の一乗三乗

	三乗	一乗
1	嬰略経三賢十地	此経所并三賢十地
2	行布次第	六相円融
3	前二是表相	内
4	前之内表	普賢無尽法数現
5	前並紙墨所載	無文字之虚空
6	無文字之虚空	有文字之虚空
7	前並教分是普賢因門	仏外向
8	仏外向	仏内向
9	仏内向	離向背
10	離向背	法性

『古記』の九重の同別二教

	同 教	別 教
1	黄牛車	大白牛車
2	大白牛車	王髻中珠
3	法華経	華嚴経
4	第二会至随好品	普賢行品已去
5	普賢現語言	普賢内証離文字
6	普賢内証	仏外向
7	仏外向	仏内向
8	仏内向	海印定中法性不可説
9	上来所明説不説等	此海印定法性不可説中、説不説無二

これらに共通するのは、①「三乗と一乗」、「同教と別教」など、華嚴学の概念の中で二項対立的なものを問題としていること。②それぞれに段階を設けるが、最初の段階は中国の華嚴に基づいた教理内容であるが、段階が進行するに随て中国の華嚴には見られない区分が行われること。③段階が進行すると、普賢内証、仏外向、仏内向など、『華嚴経』の奥深い部分に行き着き、最終的には法性に行き着くこと。これが義相系の教学的な傾向を表わしているとする。

b. 『十地経論』「加の所為」の問題

佐藤厚[1995a]「朝鮮華嚴と『十地経論』加の所為の解釈」は、均如や義相系文献（『叢髄録』所引の『法記』や『古記』など）で共通して議論とされていた『十地経論』の箇所をめぐる問題を検討したものである。

すなわち、均如の『法界図円通記』や『釈華嚴教分記円通鈔』では、それぞれの注釈対象である義相『法界図』、法蔵『五教章』の六相が説かれる段で、そもそも六相説が説かれる最初である『十地経論』の文脈（これが「加の所為」）の解釈を問題とし、この部分を解釈している人物の中で、浄影寺慧遠の解釈を批判し、法蔵の解釈を正義としている。

本論は、この議論が行われる背景を考察するために、浄影寺慧遠、智儼、法蔵、静法寺慧苑、澄観の解釈を検討し、確かに均如らが主張するような

解釈が相違が存在することを確認する。ただ、それが義相系の教学とどのような関連があるのかについてまでは触れていない。

c. 無住

また、佐藤厚[1999]は、均如文献および『叢髓録』に収録される義相系の華嚴文献に見える「無住」の概念の用例と思想的意味を考察し、この概念が、義相の直弟子から均如にいたるまでの義相系華嚴思想において広く用いられ、それが基本的には無自性と等しく相即相入の根拠として用いられていることを明らかにする。

d. 海印説

韓国華嚴思想の発展の問題と関連して、五重海印説に注目しつつ均如思想を捉えた研究として木村清孝[1987]「『十句章円通記』について—韓国華嚴思想の発展に関する一考察—」がある。本論文は、1)「十句」の問題、2)『章』と『記』の本文、3)第三句の真偽、4)法融の第三句の解釈、5)均如と第三句、の5項目よりなる。これは、華嚴思想史の観点から『十句章円通記』の性格、意義、価値を考察するものであり、均如は十重海印説によって海印論を集大成し華嚴思想史において海印論の発展に貢献していると評価する。

また佐藤厚[1996b]「『大記』の五重海印説について」は『叢髓録』の中の「大記」に示された五重海印による『法界図』解釈に注目する。すなわち「大記」が『法界図』を解釈する際に韓国華嚴の中で伝承されてきた五重海印説を『法界図』と重ねて解釈し、機根や教判をも加味しつつ体系を構築していることを論ずる。

なお、『十句章』所説の五重海印説を『華嚴経』と見、研究したものに[1998a]「義相系華嚴思想における『華嚴経』理解—『十句章円通記』を中心として—」がある。

e. 『大乘起信論』に対する批判

これは「3. 新羅・高麗代の華嚴学の系統に関する研究」で述べた佐藤厚

[2000]に説かれる。

(3) 元曉

元曉の華嚴関係の著作には、東国大学校[1982]によれば、『華嚴経疏』、『華嚴綱目』、『華嚴経宗要』、『華嚴入法界品抄』などがある。これらはすべて散逸しており現在に伝わっていない。わずかに『華嚴経宗要』などが均如に引用されて残っているだけである。

元曉の華嚴思想に対する体系的研究は多くはない。吉津[1991a]は、基本的に法蔵思想との対比によって元曉思想の性格を把握しようとする。すなわち、法相唯識の導入および教判論における和諍の立場などにおいて元曉思想の独自性を見出している。

石井公成[1996]は、元曉思想の根幹を形成するものとして『起信論』を注目する。このような視座から、「元曉の思想の進展は『起信論』に対する解釈の進展であると言っても過言ではない」と述べ、和諍の思想も『起信論』にその根拠を見出そうとする一方で、和諍思想と『莊子』の哲学や吉蔵の相即思想との関連をも指摘する。また、この研究では、義相帰国後の元曉の思想的変化、元曉と義相の智儼観の相違なども考察される。

また、元曉がいかに仏を捉えていたかの問題と関連して、佐藤繁樹[1997]は『金剛三昧経論』を中心に考察し、元曉はそれを「絶対空」として抑え、その絶対空の世界を「無二而不守一」という論理構造によって端的に表現していく、と結論する。

(4) 表貝

表貝の伝記については不詳であるが、著書『華嚴経文義要決問答』（以下『要決問答』）に「皇竜寺沙門」とあることから新羅の都にあった皇竜寺に住持していたことが知られる。

吉津[1986]では彼が「元曉・法蔵融合形態」の思想圏の人物と捉えられたことは既に見た通りである。

『要決問答』に関する本格的研究に金天鶴[1999a]がある。金天鶴は既

に韓国で『要決問答』の訳注研究を出版しており²¹、本論はその成果の一部である。そこでは『要決問答』の諸版本、引用文献を調査して文献学的研究を進める一方、教判や華嚴経観の検討によって表員の思想の性格を究明しようとする。特に教判については、元曉・法蔵・慧苑の教判を受容し、同教を明確に一乗の領域に配置することを指摘し、思想的には彼が元曉系に属することを明らかにしている。また表員の場合、華嚴処と応機の問題が『華嚴経』を理解するにおいて核心の課題として認識されていることも指摘する。

(5) 『釈摩訶衍論』の成立に関する問題

『釈摩訶衍論』10巻(大正31)は、竜樹作、後秦筏提摩多訳と伝えられるが8世紀初頭に中国か朝鮮で作られたと考えられてきた論書である。本書は空海(774-835)以来、日本の真言宗で重視されてきた。

石井[1996]は、本書の新羅成立説を論じ、さらに元曉や義相との関連を主張する。すなわち本書は、「元曉の会通の方法と思想系の問題意識を踏まえながらも、独自の議論を展開していると言ってよい」ものであり、また「『釈論』の本来の意図は、新羅における当時の諸説の会通にあったと思われる。すなわち、論争の本となっている種々の経論の異説はすべて機に応じたものであって決して矛盾せず、みな平等に価値があることを強調することにあり、当時の論争、特に『起信論』をめぐる論争をやめさせるのが目的であったと考えられるのである」(361)と推測する。また、この研究においては、『釈論』の成立と『金剛三昧経』や『金剛三昧経論』との関連も指摘される。

5. 高麗時代の華嚴

²¹金知見監修・金天鶴訳『華嚴経文義要決問答』(1996・大韓伝統仏教研究院、非売品)。この修訂版として金知見監修・金天鶴訳『華嚴経文義要決問答』(1998・民族社)がある。

本項では、高麗時代の華嚴に関する研究として、(1)均如、(2)義天、(3)知訥の3人に対する研究を取り上げる。

(1) 均如

「2. 研究史の概観」で述べたように、日本における均如研究の契機は、金知見[1977]による均如の著作の刊行である。だが、これ以前に均如研究を行っていた人物として李永洙の存在を忘れてはならない。彼の研究は均如の伝記を中心としたものであり教学の内容には触れるものはないが、日本における均如研究の先駆けとして重要である。よって、ここでは李永洙の研究から述べることにしたい。

① 伝記と著述

李永洙[1973]および[1974]の論攷は、均如の伝記を詳細に検討したものである。以下に章立てを示す。

① 序論

- 1) 本伝記の組織について
- 2) 均如大師の位階について
- 3) 均如大師の称号について

② 本論

- 1) 均如の生誕について(第一、降誕靈驗分)
- 2) 出家と進学(第二、出家請益分)
- 3) 均如とその姉との闘智(第三、姉妹齊賢分)
- 4) 南北両派とその教義(第四、立義定宗分)

[以上、李永洙[1973]]

- 5) 均如大師の道力(第六、感通神異分)
- 6) 均如大師の道力(二)(第九、感応降魔分)
- 7) 師の自在力と人生(第十、変易生死分)

[以上、李永洙[1974]]

この研究は、均如伝を正史などの記述と突き合わせて詳細に、かつ批判

的に検討を行っており、現在でも有益な研究である。

続いて李永洙[1979]では、以前の論攷の別論として均如伝の「第五解釈諸章分」を中心として均如の著述の性格とそれに関わる諸問題を取り上げている。中では1)『教分記円通鈔』、2)『十句章円通記』、3)『旨帰章円通鈔』、4)『三宝章円通記』、5)『法界図円通記』の順で検討が加えられる。この中で『教分記円通鈔』については、注釈対象となった『教分記』(『五教章』)のテキスト論、すなわち和本・草本・宋本の問題に言及している。なお李永洙[1983b]は、基本的にこれに依るものである。

また、李永洙[1983a]は、『均如伝』の中、「第四、立義定宗分」に記される「先公鈔三十余義」について、その考証を試みたものである。「先公鈔三十余義」とは、均如の師が当時の華嚴教学上の問題となる三十余りの概念について均如が解決したというものであるが、『均如伝』の中では項目が列挙されているだけでその具体的な議論の内容まではわからない。これについて李永洙は智儼や法蔵などの中国の華嚴教学の典籍、および均如の著作から、それについて触れている部分を見つけ出し、考証を加えているものである。ただし、これについては、李永洙自身が「ただ推理感と模索とを頼りとしてのみ、考え得る範囲内で調べて見る」と述べているように、果たして均如が問題としたことを言い当てているか否かは考証する術はないが、これらは均如の時代の華嚴学上の問題点と考えることができ、ひいては新羅華嚴学での問題意識を探るために重要な作業と言える。これについては未刊であるが佐藤厚[1998c]では李永洙の考察を基礎として考察を行っている。

以上、李永洙の一連の論攷は、日本で均如研究が本格的に始まる前の段階で、いわばその基礎固めと評することのできる重要な業績といわなければならない。

その他、均如の著作に関わる研究としては、金知見[1990b]「法界図円通記のテキストの再考ーその中巻の落帙をめぐるー」がある。これは、現在伝わる『一乘法界図円通記』は上・下二巻からなるが、内容から上巻と下巻の間に存在すべき部分が抜けている。これは本来は上・中・下の三巻からなる『一乘法界図円通記』が、何らかの事情で中巻が途中から

欠落したものであることを述べる。

② 思想

a. 教判論

均如の思想に対する研究は、教判論の研究がその中心である。後に見るように、均如の教判論は、『華嚴経』が①三教(漸教・頓教・円教)では頓教と円教とであり、②五教(小乗教・大乘始教・大乘終教・頓教・円教)では円教であり、③二教(同教・別教)では別教であるというものである。

この中でも①の頓円あるいは頓円一乗は均如が力説するものであり、均如の特徴的とされている。これは後の諸研究が述べるように、智儼の『搜玄記』玄談で『華嚴経』と三教(漸教・頓教・円教)の関係を述べるくだりで、『華嚴経』が頓教と円教に摂められると説かれることによると見られる。これは均如の著書に頻出することから均如の中心的な思想と考えられるのである。

高峰了州[1942]『華嚴思想史』は簡単ながら均如の思想について触れている²⁾。そこでは『釈華嚴教分記円通鈔』(以下『教分記円通鈔』)を取り上げ、『五教章』「建立一乗」では別教一乗が更に性海果分と縁起因分とに分かれ、縁起因分が分相門・該摂門に分かれるのであるが、ここをめぐる議論の中で頓円別教という均如の中心的な教判論が触れられる。次いで「義理分齊」の四門についてそれぞれ目に付いた特徴を列挙している。よって、均如の思想の本格的な解明までは至っていないが、その端緒をつけたということで意味があるといえる。

その後、金知見[1977]の解題では、均如の教学的な問題については特に触れられていない。この問題が本格的に検討されはじめるのは、1981年になってからである。

1981年には均如の思想に対する報告が相次ぐ。それは、鎌田[1981]「釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究」、吉津[1981]「華嚴教判論の展開ー均如の主張する頓円一乗をめぐるー」、中條[1981]「高麗均如の教判に

²⁾ 高峰了州[1942] pp.313-316

について」である。このことから、1981年は日本における均如の思想研究元年とも言える。

鎌田茂雄を中心とした講読会の第一回目の成果、鎌田[1981]は、1)均如の伝記、2)均如の著作とその流伝、3)均如の華嚴教学の特色、4)均如の用いた五教章(鎌本)について、5)鎌本復元の試み、6)釈華嚴教分記円通鈔における建立一乗第一略科、の6項目よりなる。1)、2)は前掲の李永洙の研究によりながら均如の伝記と著作とを紹介する。3)は『教分記円通鈔』を講読した部分を中心とする研究であり、これについては後述する。4)、5)は、均如が依用した『五教章』のテキストに関する解説とその復元である。6)は均如の注釈をもとにした『五教章』「建立一乗」の科文である。

この中で思想に触れている3)では、第一に、均如の注釈対象とした著作から教学の特色を伺う。第二に、『五教章』「建立一乗」を講読した限りにおいて言えることとして、澄観の『華嚴経疏』および『演義鈔』の幅広い活用が目立つことを指摘する。続いて均如の特徴的な教判である頓円一乗と智儼・法蔵・澄観との関係を探り、誰が一番影響を与えた人物であるのかを考察し、結果として誰もびったりとする人物はいないが、同別二教に関する限りは均如と澄観との間に類似性があること、智儼・法蔵の教学からは変化したものであることが説かれる。次いで均如の頓円一乗の主張の真意を取り上げ、仮説としながらも、『法華経』に対する態度から新羅高麗の天台宗に対する批判が込められているのではないかと述べる。同時に均如が天台の宗義について引用や批判は行っていないことから断定することはできないとしている。

同時期に出た吉津[1981]も、前述の鎌田[1981]とはほぼ同じ手続きにより考察している。本論は、1)均如の教判論、2)智儼と義湘の教判論、3)法蔵および慧苑の教判論、4)澄観と宗密の教判論、5)まとめ—頓円一乗の意図—、の5項目よりなる。この項目からわかるように、本論は均如の頓円一乗の主張の意図を明らかにするために智儼から宗密に至るまでの中国華嚴宗の人々の教判論の様相を検討するものである。そして均如の頓円一乗の主張に影響を与えた人物を探るために一人一人と比較しその関連を探る。最後に均如の頓円一乗の背景として、法相宗、天台教学、禪宗などを候補

に挙げ、今後の研究の問題提起としている。

これも同時期に出た中條[1981]でも『五教章』「建立一乗」の別教の部分に対する注釈を通して、均如の教判、中でも同別二教・五教に関する解釈の特徴を指摘している。そしてその背景として、①高麗天台との関わり、②実践家的な性格、③澄観の思想の性格との近似性を挙げている。また、翌年に出された中條[1982]「高麗均如の五教章注釈について」は紙数こそ少ないが、均如の教判論の背景を探るために『五教章』「叙古今立教」で慧光の三種教を解釈する部分を取り上げ、そこで論じられる智儼の『搜玄記』の三教の解釈を分析している。

その後、吉津[1991a]『華嚴一乗思想の研究』「第六章 一乗義の展開と別教一乗」「第四節 法蔵以降の華嚴諸師の一乗義」の中、「五 均如の頓円一乗義」²³では、基本的には吉津[1981]と同様の主張を行なう。法蔵と類似した華嚴至上主義を窺うことができ、そこから三乗の法相人への批判も散見すること。天台教学・禪に対する意識に関しては要検討とする。

金天鶴[1997]「均如の頓円一乗義の成立と意図について」は頓円一乗の成立と意図を考察する。本論文は1)問題の所在、2)漸頓円の思想、3)頓円一乗の意図、4)まとめ、の4項目からなる。この中、2)では漸教・頓教・円教の三教の意味について、智儼の『搜玄記』の玄談の真意を探り、次いで均如の解釈を検討して、両者の差を見出していく。そこでは、智儼では同別二教の考え方が存在しているが、均如においては同教を低く位置づけるという違いが明らかにされる。次いで3)では、まず頓円一乗の成立を問題とし、それが所為の問題から説かれたものであることを述べる。また、頓円一乗については均如以前から様々な見解が出されていたことを述べ、それらを取捨選択する過程で形成されたことも述べる。最後に均如の頓円一乗の教判が従来の様々な教判的見解を纏めた結果であり、華嚴思想の哲学的体系化という側面からも高く評価すべきものであると述べる。

以上のように、均如の思想に対する研究は、教判論、中でも頓円一乗の研究がその中心となっている。これ以外の研究には、次に紹介する金天鶴

²³ pp.480-483

[1998b] がある。

b. 二乗廻心の問題

金天鶴 [1998b] 「均如の華嚴学における二乗廻心」は、中国において早くから菩薩のみを対象とすると考えられてきた『華嚴經』について、華嚴教学においてどのように声聞・縁覚の二乗を包摂するか、ということを経典的な問題としつつ、それを均如がどのように考えていたのかを扱ったものである。内容は、I. 問題の所在、II. 中国華嚴学における二乗廻心義、III. 均如の二乗廻心義、からなる。この中、II. では智儼と法蔵の廻心の解釈とその異同を検討し、III. ではそれらを承けた均如の解釈を検討する。その結果、均如の二乗廻心の解釈は、新羅の伝統的な解釈に基づきつつも、頓円一乗を掲げる立場から、独自の解釈を行なっていることを明らかにする。

(2) 義天

義天 (1055-1101) と華嚴思想との関わりは深い。それは、入宋して浄源から華嚴を学び、また『円宗文類』などの編纂を行っていることからわかる。ただ、義天自身が直接華嚴に関わる文献を著わしていないこともあり、彼がどのような華嚴思想を有していたかについて探るのは難解である。さらに義天は華嚴だけでなく、天台や唯識、律などにも造詣が深く、そうした諸宗に通じた立場をどのように規定するかが問題となる。

これについては、古く大屋徳城 [1937]²⁴が義天の態度を「多分に宋朝仏教の風潮たる諸宗相融の影響を受け」と評するように、諸宗融合を旨とするような捉え方が一般的である。

こうした見方は現在でも変わらず、既に「3. 新羅・高麗代の華嚴学の系統に関する研究」で紹介した吉津宜英 [1995] でも義天は諸宗融合的な思想を有していたとし、ここから均如のような華嚴のみを至上とする教学者を批判したと述べている。

(3) 知訥

普照国師知訥は、主として禅の人物として捉えられ、本特集号でもそちらで触れられている。だが、同時に華嚴学の人物としても捉えることができるため、ここでも若干論ずることとする。

知訥の華嚴思想は『華嚴論節要』を中心とする。これは金沢文庫に所蔵されており、一般の目に触れることはなかったが、1968年に金知見 [1968] によって覆刻・流布され研究の緒についた。

思想内容に関する本格的な研究は、木村 [1981a]、木村 [1988a] において行われた。木村はまず、『華嚴論節要』を『合論纂要』『合論簡要』『新華嚴經論』などと比較し、その特徴を明かす。そして、『華嚴論節要』が単なる『新華嚴經論』の抄出本ではなく、むしろ基本的には李通玄の権威と言葉とを借りて、知訥が自らの思想的立場を表明したものであることを論証する。

また、これは『華嚴論節要』の実践思想の基本的特徴の一端を明かしている。すなわち、『華嚴論節要』は『新華嚴經論』の仏光観に関する記述をおおむね、そのまま受け継いでおり、ここに知訥の仏光観重視の立場が確認されるものの、彼はやはり「頓悟漸修」を掲げる禅の伝灯者であって、自ら仏光観を実習したり、積極的に宣揚したとは思われない、と推測する。

ほかに『華嚴論節要』の研究には中島志郎の中島 [1995a]、中島 [1995b] がある。そこでは知訥は『華嚴論節要』において、李通玄の華嚴思想と大慧の看話禅を「頓悟漸修」の論理構造の上に矛盾なく統合する独自の論理を実現している、とされる。

なお、小島岱山 [1983] は、韓国華嚴思想は、主体的かつ実践的であるという特徴をもち、ゆえに禅と深く結びつき教禅一致の仏教の思想的基盤を形成するものであり、その代表が知訥であるという。そして知訥の教禅一致は宗密の影響を受けているが、その思想的淵源をたどれば李通玄の『新華嚴經論』に行き着くという。

²⁴ 大屋徳城 [1937] p.103

6. 朝鮮時代の華嚴

本項では、朝鮮時代の華嚴に関する研究として、(1) 雪岑、(2) 有聞の研究を取り上げる。

(1) 雪岑

李朝時代に活躍した雪岑(1435-1493)は、出家前の俗名は金時習、字は悦卿、号は東峯・清寒子・碧山清隱・贅世翁・梅月堂であり、雪岑は出家後の諱である。著作には、『蓮經別讃』一卷、『華嚴釈題』一卷、『大華嚴一乘法界図註并序』一卷、『十玄談要解』一卷などがあり、現在、韓国仏教全書第7冊に収録されている。

日本における雪岑の研究は、古くは高橋亨『李朝仏教』はあるが、これは禅の側からの研究であり華嚴学の立場からではない。その後は殆ど研究はなされず、1980年代位から韓国の研究者の報告がいくつかある程度である。

『大華嚴一乘法界図註并序』(以下『法界図註』)に対する研究には、韓鍾萬[1982]「朝鮮朝初期雪岑の法界図註釈」がある。本論は『法界図註』における『法界図』三十句の解釈を解説し、「雪岑の註釈は華嚴思想の核心を、簡明でありながら、しかも、生動する面にあかしたといえるであろう。故に、均如の註釈が教学的であるといえるならば、雪岑の註釈は禅的である」と雪岑思想の性格を述べている。

『華嚴釈題』(以下『釈題』)の研究には、盧在性[1997]「雪岑の『華嚴釈題』に及ぼした澄観の著述」がある。『釈題』については、1989年に玉城康四郎が「華嚴釈題の仏教学的意義」(未見)を発表しており、本論はそれに基づくという。内容は、1)『釈題』に引用された澄観の著述、2)『釈題』と澄観著書との比較表、からなる。その結果、『釈題』における澄観の影響を実証している。ただ、論考の最後には、雪岑と澄観とは同じく禅教一致でも観点が違うことを述べ、澄観が華嚴教学の立場に立って禅を吸収しているのに対し、雪岑は寧ろ禅の立場から華嚴教学を理解していたという。

(2) 有聞

道峰有聞(生卒年不詳)は伝記を窺わせる史料が存在しないために、どのような生涯を送った人物かはわかっていない。ただ、彼の著作である『法性偈科註』に記された弟子賢陟の序文の作成年代から、ほぼ18世紀の半ばから後半にかけて活躍した人物と考えられている。

さて、『法性偈科註』は義相の『法界図』に対する科文であり、現在、韓国仏教全書第10冊に収録されている。

これに対する研究である李杏九[1984]は、有聞の法性偈の科目を図示し、賢陟の序文を紹介するなかで、法性偈の読誦により浄土往生が可能となることに注意しながら、最後に有聞の法性偈の科目の特徴として、1)義相の華嚴思想が新羅時代から最近(18世紀末)まで絶え間なく伝承されたこと、2)分科の仕方に特色があり、他の法界図註釈書と比較して研究するに役立つこと、3)施食法会が回向される前に必ず法性偈が唱えられる理由、即ち、その呪誦に依って不思議な靈驗(浄土往生)が得られることを明らかに述べていること、等に大きな意義があると述べる。

以上の如く、朝鮮時代の華嚴についてはわずかな研究しかなく、その少ない例はみな韓国の方の研究である。その要因の一つは、例えば雪岑の著作を例にとると、もはや教学的な華嚴ではなく、禅の境界を説明するためのものという色彩が強いため、普通の方法論では研究していくことが難しいということがあると考えられる。また、これは朝鮮半島だけでなく、中国でも宋代・元代以後は似たような形態になっており、そうしたところに従来の研究者の目が向かなかったことがその一因でもあろう。

7. その他一華嚴信仰に関する研究一

前項までが、いわゆる華嚴教学か、あるいは時代別の人物・著作の研究であったのに対し、本項では、そうした研究では触れられない、華嚴信仰に関する論文を扱う。

李杏九〔1982〕は、華嚴法会を中心として韓国仏教における華嚴信仰の展開を調査し、韓国仏教において『華嚴經』が如何に読誦され、伝承されて来たかを信仰的な側面から調査を行っている。華嚴法会に現れている華嚴信仰は、新羅時代においては、『華嚴經』の講読、講誦に依って奇端、神異が現れるという感応信仰が特徴であるという。また、高麗時代の華嚴信仰の特徴は、現世利益を目的とする祈福的な信仰として『華嚴經』が用いられ、護国のために設けられた華嚴神衆法会が行われるという。そして、朝鮮時代は、排仏政策の実施という受難期において、教壇は王室との結びつきを計って新しい転換を摸索する方向で華嚴信仰が行われているという。

また、同様の問題を扱った研究として張愛順〔1997〕がある。これは『三国遺事』における華嚴関係資料を中心に、そこに現れる華嚴信仰を調査している。その結果、『三国遺事』における華嚴信仰の特殊性として、華嚴結社と菩薩住処信仰に着目する。すなわち、華嚴結社については、信仰結社の側面もさることながら国家や王室のために除災祈福する行事として形成された面もあることを明らかにしている。また、菩薩住処信仰については、これは新羅における華嚴信仰の受用の一形態として、慈蔵による五台山の文珠信仰や義相による洛山の観音信仰などによってそれが確認されることを明らかにしている。

なお、韓国は華嚴の風土と言われるが、現在の韓国仏教の性格をも考慮に入れて華嚴思想の韓国仏教への影響の問題を考察した研究としては、金漢益〔1997〕が注目される。これは韓国での仏教儀礼の際に読誦されるものを集めた『釈門儀範』の中で華嚴思想が盛り込まれているものを調査し、その結果、韓国仏教が華嚴的な土壌で成り立っていることを論じている。

8. おわりにー研究の課題と展望ー

以上、ほぼ1900年代からこの100年間の日本における韓国華嚴に対する研究の概観と個別研究の成果について述べてきた。概観の触れた如く、現在は韓国華嚴の研究が活発といえる時代であろう。それも1970年代から80年

代にかけての金知見、鎌田茂雄の土台作りによるところが大きいと思われる。最後に今後の韓国華嚴研究の課題を述べると次のような点を指摘することができる。

(1) 高麗、朝鮮時代の研究の不足

第一に、新羅時代・高麗時代・朝鮮時代という時代区分の中では、新羅時代の研究が最も多く、次いで高麗時代、朝鮮時代の順になる。これにはいくつかの要因を考えることができる。

一つには、日本における中国仏教研究が隋・唐代の仏教を中心としてきたことが関係すると考えられる。隋・唐代の仏教は日本に現在まで存続する諸宗派との関わりが深く、また日本仏教の流れの中で教理研究が開始されたのが、まさにこの時代の仏教であった。よって、近現代の日本の中国仏教研究者の目が隋・唐代の仏教に中心的に注がれ、朝鮮が視野に入ってくるとそれらにも同時に言及しようとしたのであると考えられる。よって、中国史の中で宋代・元代・明代・清代に相当する高麗時代、朝鮮時代の仏教に目が行かないのも理解できよう。

二つには、高麗時代、朝鮮時代の仏教が、中国仏教のトレンドに合わせて禪と浄土との融合形態という思想的な問題がある。禪という思想自体がそれ以前の教理的な研究に対するアンチテーゼという色彩を持つだけに、純粋な教理研究の方法論が持ち込めず、そのために禅学の研究と教理の研究は自ずと方法論的な立場を異にするため、それらを包括するような方法論を構築しない限り思想史として論ずることが困難ということもあると考えられる。

将来的にはこれらの点を考えていく必要があると考えられる。

(2) 文献的な問題ー逸文資料収集の重要性ー

第二に、第一で新羅時代の研究が一番盛んであったと述べたが、そこにも解明されなければならない問題は残されている。第一には文献の問題である。前述したように、新羅において華嚴教学に関する著作は10人を越える人物によって著わされており、華嚴学研究が盛んであったことは確かだ

あろう。だが、現段階では現存する文献だけでその系統などを論じなければならないところに問題がある。そのために必要なのは、これら失われた文献の搜索と、逸文の収集である。その為には、日本の文献の調査が必要となる。日本の華嚴学関係の著作には、新羅時代の韓国華嚴文献の逸文が多く収録されている。例えば、寿靈の著作に元暁や表員が引用されており、また鎌倉時代の凝然の著作にも華嚴だけに止まらず多くの新羅の学僧の文献が引用されている。これら日本の華嚴文献は、『大正新脩大藏經』、『大日本仏教全書』、『日本大藏經』などの叢書に収録されているが、現在、それらに収録されておらず、寺院や大学・研究機関に写本として存在しているものも膨大に存在する。それらの文献を一つ一つ搜索し、翻刻・読解を行いながら新羅人の著作を明らかにしていくことが重要である。これは新羅仏教の研究のみならず日本仏教の研究にも大きな意味を持つ。よって、朝鮮仏教の研究だからといって、朝鮮内部に止まるのではなく、中国・日本の仏教史中でも文献に注意を払っていくことが重要である。

(3) 同時代的な問題としての華嚴思想の解明—華嚴教学そのものの捉え直し—

「2. 研究史の概観」でも述べたように、現在の華嚴学研究のトレンドの一つは東アジア的な視点から華嚴を捉え直すことである。それらは、吉津[1991a]による一乗思想をキーワードとして華嚴以外の思想をも視野に入れ華嚴教学を捉え直し、また小島[1989]のように終南山系・五台山系という地域による思想圏という把握の仕方であり、或いは石井公成[1996]のように所謂の華嚴教学の前段階に華嚴至上主義の地論学派の存在を解明するものであったりする。これらは明治時代までの伝統五祖説を一度棚上げにしながら、新たな視点から華嚴思想を捉え直すということでは共通している。そしてそれらの作業の中で韓国華嚴も位置づけられてきたのであった。今後の韓国華嚴研究も、これらの成果を参照しつつ、できるだけ同時代的な問題意識をもちながら進めていかなければならない。

(4) 個別研究の重要性

当たり前のことであるが、一個人の思想を解明するには著作を読まなければならない、著作を読むという作業は漫然と行なうものではなく、絶えず同時代、あるいは前後する時代の文献との対比に留意しなければならない。このような視点に立ち、一つ一つの文献の詳細な訳注研究を積み重ねていくことが、大きな思想の流れを解明する基礎となることは、今更ながら言うまでもない。だが、日本において韓国華嚴文献は、文献が少ないながらも完全に「読まれている」とはいえない。よって、研究者は「大きな思想」に留意しつつも、一つ一つの文献の詳細な訳注研究を積み重ねることが大切である。

以上、与えられたテーマについての叙述を終わることとする。著述にあたってはできるだけ客観的な評価を心掛けたが、筆者自身の見識の不足により間違いをしているかもしれない、さらには筆者自身の関心が向いている箇所と言及が偏った感もないわけではない。どうか、これを一つの見方と捉え、研究の一助になれば幸いである。

最後に蛇足ではあるが、日本の研究者として韓国の研究者にお願いしたいことは、論文の中で漢字をもっと使用してほしいということである。今では日本人の韓国仏教研究者でもハングルを習得しようという意欲は高まっている。だが、ハングルだけの論文と漢字ハングル混在の論文とでは、読解の能率が全然違う。これは日本人だけでなく、中国人・台湾人の研究者でも事情は同様であろう。「韓国国内で発行する論文が想定する読者は韓国人だから構わない」と言われればそれまでであるが、今の時代、研究は韓国だけに留まらず、日本を含めた他の地域にも同時に発信されるものと考え、是非ともこの点を考慮していただきたい。

略号および参考文献一覧

◆ 略号

大正藏=大正新脩大藏經

続藏=大日本統藏經

韓仏全=韓国仏教全書

『印仏研』=『印度学仏教学研究』

『東文研紀要』=『東洋文化研究所紀要』

◆ 参考文献一覧

※配列は国別筆者名五十音順

I. 日本人筆者

- 石井教道 [1964] 『華嚴教学成立史』 (石井教道博士遺稿刊行会)
- 石井公成 [1983] 元曉と中国思想／『印仏研』31-2
- [1985] 『華嚴経問答』の著者／『印仏研』33-2
- [1988a] 『釈摩訶衍論』における架空經典／『仏教学』25 (仏教思想学会)
- [1988b] 『釈摩訶衍論』の成立事情／『中国の仏教と文化』 (鎌田茂雄博士還暦記念論集・大蔵出版)
- [1989] 理理相即説の形成／『フィロソフィア』76 (早稲田大学)
- [1994] 新羅華嚴教学の基礎的研究 - 義相『一乘法界図』の成立事情 -／『青丘学術論集』4 (韓国文化研究振興財団)
- [1996] 『華嚴思想の研究』 (春秋社)
- 石橋真誠 [1971] 元曉の華嚴思想／『印仏研』19-2
- 今津洪嶽 [1917] 海東華嚴初祖義湘大徳の事蹟及び教義／『宗教界』13-3,4,5.
- [1924] 海東華嚴初祖義湘大徳の事蹟及び教義／『観想』4 (東洋大学)
- 梅津次郎 [1948] 義湘・元曉絵の成立／『美術研究』15-4 (美術研究会) 編

- 大竹晋 [1999a] 理理相即と理理円融 - 『花嚴止観』論攷 -
／哲学・思想論叢17 (筑波大学哲学思想学会)
- [1999b] 華嚴の三性説 - 行三性と解三性 -／『宗教研究』322
- 鎌田茂雄 [1959] 法蔵撰華嚴経問答について／『印仏研』7-2
- [1978] 華嚴五教章円通鈔研究 - 第1回国際仏教学術会議 -
大韓伝統仏教研究院
- [1980] 『韓国華嚴思想史の研究』 (東京大学東洋文化研究所)
- [1981] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究／『東文研紀要』84 (東大・東文研)
- [1982] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究 (二)／『東文研紀要』89
(東大・東文研)
- [1983a] 『華嚴学研究資料集成』 (東京大学出版会)
- [1983b] 『華嚴の思想』 (講談社学術文庫)
- [1984a] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究 (三之一)／『東文研紀要』94 (東大・東文研)
- [1984b] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究 (三之二)／『東文研紀要』95 (東大・東文研)
- [1987a] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究 (四)／『東文研紀要』102
(東大・東文研)
- [1987b] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究 (五)／『東文研紀要』104
(東大・東文研)
- [1988] 『新羅仏教史序説』 (大蔵出版)
- 亀谷聖馨・河野法雲 [1913] 『華嚴發達史』 (名教学会)
- 木村清孝 [1978] 華嚴十句章円通鈔研究／第1回国際仏教学術会議 (大韓伝統
仏教研究院)
- [1981a] 華嚴経合論節要について／『大乘仏教から密教へ』 (勝又
俊教博士古稀記念論集・春秋社)
- [1981b] 元曉の闡提仏性論／『仏教の歴史的展開に見る諸形態』 (古
田紹欽博士古稀記念論集・春秋社)

- [1982] 韓国仏教における理相即論の展開／『南都仏教』49
- [1987] 十句章円通記について－韓国華嚴思想の発展に関する一考察－／『華嚴学研究』創刊号（華嚴学研究所）
- [1988a] 李通玄と普照国師知訥－『華嚴論節要』研究への一視点－／『普照思想』2（普照思想研究院）
- [1988b] 『白花道場発願文』考／『中国の仏教と文化』（鎌田茂雄博士還暦記念論集・大蔵出版）
- [1994] 『白花道場発願文』再考／『朝鮮文化研究』1
- 清田圭一 [1997] 義湘の世界観（海東華嚴成立の基盤）／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 河野法雲 [1919] 新羅の義湘法師の伝に就て／『無尽燈』24-2
- 小島岱山 [1983] 韓国仏教における華嚴思想の展開－『華嚴論節要序』を中心として－／『理想』606
- [1992] 新たな韓国華嚴思想史－日・中・韓三国融合東アジア仏教学の堤唱－／『印仏研』40-2
- 坂本幸男 [1935] 新羅の義湘の教学（上）／『思想と文学』（東洋大学）1-2
*坂本 [1956] に再録
- [1936] 新羅の義湘の教学（下）／『思想と文学』（東洋大学）2-1
*坂本 [1956] に再録
- [1956] 『華嚴教学の研究』（平楽寺書店）
- 佐藤厚 [1994] 『一乘法界図円通記』解説における二つの問題／『東洋大学大学院紀要』30
- [1995a] 朝鮮華嚴と『十地経論』加の所為の解釈／『東洋大学大学院紀要』31
- [1995b] 均如『一乘法界図円通記』と「大記」との関連／『印仏研』86(43-2)
- [1996a] 義湘の中道義／『東洋大学大学院紀要』32
- [1996b] 大記の五重海印説について／『印仏研』88(44-2)
- [1997] 義湘の教判思想／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- [1998a] 義湘系華嚴思想における『華嚴経』理解－『十句章円通記』

- を中心として－／『印仏研』90(45-2)
- [1998b] 義湘系華嚴文献に見える論理－重層的教理解釈－／『韓国仏教学SEMINAR』7
- [1998c] 新羅高麗華嚴教学の研究－『一乘法界図円通記』を中心として－（博士論文）
- [1999] 義湘系華嚴思想における無住／『印仏研』94(47-2)
- [2000] 義湘系華嚴学派の基本思想と『大乘起信論』批判－義湘と元曉の対論記事の背後にあるもの－／『東洋学研究』37（東洋大・東洋学研究所）
- 佐藤繁樹 [1997] 元曉哲学と華嚴思想／『華嚴学論集』（大蔵出版）鎌田茂雄博士古稀記念
- 高峰了州 [1942] 『華嚴思想史』（百華苑）
- [1976] 『華嚴論集』（国書刊行会）
- 玉城康四郎 [1980] 義相の華嚴思想／第三回国際仏教学術会議 大韓伝統仏教研究院
- 東国大学校仏教文化研究所編
- [1982] 『韓国仏書解題辞典』（日本語版）（国書刊行会）
- 中島志郎 [1995] 知訥『華嚴論節要』の性格－李通玄『新華嚴経論』との対照から－／『花園大学文学部研究紀要』27
- [1995] 知訥における『華嚴論節要』の意味／『印仏研』44-1
- 中條道昭 [1981] 高麗均如の教判について／『印仏研』29-2
- [1982] 高麗均如の五教章注釈について／『印仏研』30-2
- 中村元編 [1960] 『華嚴思想』（法蔵館）
- 八保谷孝保 [1939] 新羅僧義湘伝考／『支那仏教史学』3-1
- 福士慈稔 [1997] 新羅王権と華嚴思想／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 古田紹欽 [1937] 義湘の行業と教学／『宗教研究』新14-2
- 見山望洋 [1911] 新羅の名僧曉・湘二師／『新仏教』12-6
- 結城令聞 [1976] 華嚴五教章に関する日本・高麗両伝承への論評／『印仏研』24-2
- [1978] 華嚴章疏の日本伝来の諸説を評し、審詳に関する日本伝承の

根拠と、審詳来日についての私見／『南都仏教』40

[1983] 『華嚴五教章』の高麗鍊本・径山写本（宋本）の前却と和本の正当性について／『南都仏教』50

湯次了栄 [1915] 『華嚴大系』（法林館）＊〈復刻版〉[1975]（国書刊行会）

吉津宜英 [1978] 華嚴五教章の研究／『駒澤大学仏教学部研究紀要』36

[1981] 華嚴教判論の展開 一均如の主張する頓円一乗をめぐって／『駒澤大学仏教学部研究紀要』39

[1983] 「縁起と性起一訳経から教学形成への一視点」／『東洋学術研究』22-2（105）

[1985] 『華嚴禪の思想史的研究』（大東出版社）

[1986] 新羅の華嚴教学への一視点－元曉・法蔵融合形態をめぐって／『韓国仏教学SEMINAR』2

[1988] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究（6）／『華嚴学研究』2（華嚴学研究所）

[1991a] 『華嚴一乗思想の研究』（大東出版社）

[1991b] 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究（7）／『華嚴学研究』3（華嚴学研究所）

[1994] 廓心『円宗文類集解』巻中について／『駒澤大学仏教学部研究紀要』52 ＊柴崎照和との共著

[1995] 廓心『円宗文類集解』巻中の研究－「円宗文類集解」巻中の教学の特色について／『印仏研』43-2

2. 韓国人筆者

金相鉉 [1984] 「新羅華嚴学僧の系譜とその活動」（『韓国華嚴思想史研究』（民族社・1988年））

[1991] 『新羅華嚴思想史研究』（民族社・ソウル）

金知見 [1968] 華嚴論節要について／『印仏研』16-2

[1969] 円頓成仏論について／『印仏研』17-2

[1970a] 寄海東書考－特に五教章和本・宋本の背景について－／『学

術年報』1

[1970b] 法集別行録節要并私記について／『印仏研』18-2

[1971a] 寄海東書考／『学術論文集』1（財団法人朝鮮奨学会）

[1971b] 華嚴一乘法界図について／『印仏研』19-2

[1973a] 新羅華嚴学の系譜と思想／『学術院論文集』12

＊『韓国華嚴思想史研究』（民族社・1988年）に再録

[1973b] 校注法界図円通記／『新羅仏教研究』（山喜房仏書林）

[1977] 『均如大師華嚴学全書』（日本語）上下（後楽出版）

[1988] 新羅華嚴学の系譜と思想／『韓国華嚴思想史研究』（民族社・ソウル）

[1990a] 義相の法諱考－海東華嚴の歴運をめぐって－／『韓国仏教学SEMINAR』4

[1990b] 法界図円通記のテキストの再考 一その中巻の落帙をめぐって－／『印仏研』38-2

[1991] 海東華嚴の源と流れ／『我の思想』前田専学博士還暦記念論集（春秋社）

[1992] 義相伝再考／『印度学仏教学研究』40-2

[1997a] 法界図記のテキスト再考 一因陀羅尼の表記について－／『東方』13（東方学院）

[1997b] 均如伝再考－亡命の魂－／『華嚴学論集』（大蔵出版）

[1997c] 『一乘法界図合詩一印』（空書）

金天鶴 [1997] 均如の頓円一乗義の成立と意図について／『東方』13（東方学院）

[1998a] 訳注『華嚴経文義要決問答』（民族社）

[1998b] 均如の華嚴学における二乗廻心／『韓国仏教学SEMINAR』7

[1999a] 『華嚴経文義要決問答』の基礎的研究／『朝鮮半島に流入した諸文化要素の研究（2）』学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 No.44

[1999b] 『均如の華嚴一乗義の研究－根機論を中心として－』

- 金漢益 [1997] 韓国仏教儀礼に反映された華嚴思想／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 金福順 [1990] 『新羅華嚴宗研究』（民族社・ソウル）
- 高翊晉 [1989] 『韓国古代仏教思想史』（東国大学校出版部）
- 蔡印幻 [1997] 韓国華嚴祖師海印寺希朗／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 崔柄憲 [1980] 高麗時代における華嚴学の変遷—均如派と義天派との対立を中心として—／『韓国史研究』30
- 全海住 [1999] 『一乘法界図』の著者について／『印仏研』94(47-2)
- 張愛順 [1997] 三国遺事における華嚴思想／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 陳永裕 [1986] 『華嚴経』十回向品の考察／『韓国仏教学SEMINAR』2
- [1993] 華嚴観法の研究（博士学位論文要旨）／『韓国仏教学SEMINAR』5
- [1995] 『華嚴観法の基礎的研究』（ソウル・民昌文化社）
- 李永洙 [1973] 均如大師伝の研究（上）／『東洋学研究』7（東洋大・東洋学研究所）
- [1974] 均如大師伝の研究（中）／『東洋学研究』8（東洋大・東洋学研究所）
- [1979] 均如大師伝の研究（下）／『東洋学研究』13（東洋大・東洋学研究所）
- [1983a] 均如大師伝の研究（下二）—均如大師伝第四立義定宗分に於ける「華嚴教中先公の鈔三十余義」について—／『東洋学研究』18（東洋大・東洋学研究所）
- [1983b] 均如大師の著述と周辺とについて／『印仏研』32-1
- 李乾熙 [1997] 韓国華嚴思想の特質／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 李基白 [1982] 『韓国史講座』1（一潮閣）
- 李鍾益 [1989] 普照著述の書誌学的解題／『普照思想』3普照思想研究院
- 李杏九 [1980] 羅末・麗初の過渡期的華嚴思想／『印仏研』29-1
- [1982] 韓国仏教における華嚴信仰の展開—華嚴法会を中心に—／『印仏研』31-1
- [1984] 有聞の法性偈科註について／『印仏研』32-2

- 李平来 [1980] 元曉の真如観—起信論海東疏を中心に—／『印仏研』29-1
- 盧在性 [1997] 雪岑の『華嚴釈題』に及ぼした澄観の著述／『華嚴学論集』（大蔵出版）
- 韓鍾萬 [1982] 朝鮮朝初期雪岑の法界図註釈／『印仏研』30-2
- [1997] 義相華嚴の『法界図叢随録』的理解／『華嚴学論集』（大蔵出版）
3. 中国人筆者
- 姚長寿 [1996] 房山石経における華嚴典籍について／『中国仏教石経の研究』（京都大学学術出版会）

サトウ アツシ(東洋大学非常勤講師 博士(文学))
曹潤鎬(全南大講師, 東京大 文学博士)